

郎路生麻·幹主

# 川柳新誌

號輯特春新



川柳新誌 第一號 五月五日 發行



古本屋漁りの興味と！

古本屋そのもの、面白味を知りたい人は「古本屋」をお読み下さい

# 古本屋

年五回發行

實費にて頒布

一號賣切二號三號少數

殘本あり

珍書や絶版書をおさびしになりたい人や古本の價值を知らうとなさる人は「古本屋」をお読み下さい

「古本屋」發行所 荒木伊兵衛書店

大阪市西區江戸堀南通リ三丁目

電話土佐堀一四六一番

振替大阪一二八五六番

川柳雜誌 新春特輯號 (第五卷第一號) 目次

【感想。評論】

不朽の洞窟筆……………麻生路郎…(四)

川柳の背後……………河野春三…(五)

人形の思索……………大島濤明…(五)

龍の雑筆……………安川久流美…(五)

川柳瓊音先生……………蛭子省二…(五)

經濟時事吟……………三好革郎…(五)

南船場より……………安井ひろし…(五)

ふるふるき……………岩本素人…(五)

鼻……………庄萬よし…(五)

麻生先生の選句眼……………北澤高峰…(五)

時代は進む……………源代まさを…(六)

【研究。其他】  
廿四篇まで……………麻生路郎…(六)

川柳の本質……………田中辰二…(六)

時代川柳大觀に就いて……………岡田三面子…(三)

柳評 評釋……………(一)……………五高教授……………田中辰二…(六)

……(上)……………法學博士……………岡田三面子…(三)

最初の吉利支丹

漫これは不思議ではないで  
詩せうか女中さんお嬢さん

川柳  
漫語  
女  
ご  
こ  
ろ

戸籍調餘談  
古籍調餘談

募芝居  
集辻占  
窓

大阪支部聯合句會

【副作】

近川柳塔作

雷相 花童子 右大臣 萬よし 駒乃人 三笑 杏三 悟郎 柳路  
濁水 眠聲 琴人 葭乃 朝陽 柳骨 柳一路 二柳子

粒 省二 久流美 松郎 柳陽 柳秀 春三 諸 家(七)

近作 柳柳 樽 壇 柳陽 柳秀 春三 諸 家(七)

各 地 柳柳 壇 柳陽 柳秀 春三 諸 家(七)

表 紙 繪(梅)小出桐重 編輯後記 革 郎 生(七)

木村半文 錢(三〇)

長野晴濱 (三〇)

柴生路郎 評(三六)

石賀馬行 (四二)

蛭子省二 (四八)

森東魚選 (四二)

小西兔絲子選 (四四)

中野柳陽共選 (四四)

橋本二柳子選 (四四)

麻生路郎 (六)

柳路 (三〇)

柳路 (三〇)

柳路 (三〇)

柳路 (三〇)

柳路 (三〇)

柳路 (三〇)

# 不朽洞雜筆

麻生路郎

蛙は戀もすれば尿もする。古池へ飛び込んで俳句の革命もすれば柳に飛びついて忍耐力の養成もする。詩でござれ歌でござれ、童謡でござれ、俗謡でござれ、どこへでもひよこくさあのぶさいくな姿をあらはしては常に詩人さ握手をしてゐる。

古池や蛙飛び込む水の音 俳句

古池に蛙飛び込み浮いてゐる 川柳

一つ宛かへるをしまふ水の音 同

きやつさいふ娘のあまに蛙さび 同

一人子に草をわかつて赤がへる 同

俳句では寂びを教へ、川柳では滑稽を示してゐる。古池に蛙飛び込み浮いてゐる」は芭蕉の俳句から脱化した寫生句で、輕みと皮肉味を横溢させてゐる。「一つ宛かへるをしまふ水の音」は人の足音に驚いて、次から次へに飛び込む態を巧みにスケッチした句で、川柳的な觀方を示した句だ。さいふこが出来る。きやつさいふ娘のあまに蛙さび」はすましこんだ娘さんの魂を寒からしめ、「一人子に草をわかつて赤がへる」は人情味がよく出てゐる。

この滑稽な飄逸な而も人情味たつぷりな詩人さまも曾てはお玉杓子にすぎなかつたのである。が、尻がむづ／＼して、いつのほごにかしつほが生へ、續いて手や足が生へ、水から陸へのそくとあがつて來て柳に飛びついたり、蓮

の葉に飛び乗つたりして、廣い世界が水以外にあることを知るのである。

近ごろ讀んだものなかで、アンリー・ファブルの「昆蟲記」位私を感激させたものはない。電車の中でも、道を歩いてゐても、食事の合間でも私は呼吸をもつかずに讀み耽つた。スカラベサクレ（馬や牛や羊の糞を丸めて大きな彈丸をつくり、それを穴の中に運び二週間も三週間もかかつて食糧としてゐる甲蟲の一種）の生活そのものに驚かされたのは勿論であるが、その昆蟲の異様な生活について研究をつづけてゆくアンリー・ファブルの根強い態度には自ら頭が下つた。エドモン・ロスタンの言葉を藉りて云へば、「此の大科學者は哲學者のやうに考へ、美術家のやうに見、そして詩人のやうに感じ且つ書いた」のである。

彼は、如何なる困難にも打ち勝つだけの熱と力をもつて突き進んだ。そんなに莫迦らしいことでも辭しなかつた一例を擧げる。スカラベサクレが、どうして幼虫を育てるかさいふ難問題にぶつつかつた時に、彼は次のやうに述べてゐる。

「私は大きな虫籠を作つて見た。砂と人工の地を造つてそこへたべ物を入れて時々それを新しく代へてやつた。そしてそこへ、二十ばかりのスカラベサクレをほかにコアリシヤシヤノアウルやオントプアシュなども一緒にに入れて置いた。昆蟲學の實

験でこんなに私をてこずらしたことは嘗てなかつた。厄介なのはたべ物を代へてやる事だつた。私の家主は厩馬を持つてゐた。私は其の下男の信用を得て、はじめは私の云ふ事を笑つて相手にしなかつたが、やがて小さな銀貨で承知してしまつた。それで此の虫共の毎日の朝飯が二十五サンチムがかつた。糞虫の豫算がこんな金高に上つた事は未だ嘗てあるまい。」

下男は毎朝、馬の手入れが済むと兩方の庭の境の堀から頭を出し、そつと手で喇叭をつくつて「おいおい」云つて彼を呼んだ。彼はその聲を聞き糞の一杯はいつてゐる壺を受けとるために走つて行つた。ところがこの取引がなかく骨が折れた。ある日のこと、その取引の最中を主人に見けられた。その糞が堀を越して宿替をするのはつきり、フアブルの庭の美女櫻や水仙のこやしになるのだと思つたのだ。フアブルが幾らその事實を説明しても駄目だつた。そして其の下男は散々吐り飛ばされて、こんざやつたら眼をやるぞ云つて嚇かされた。

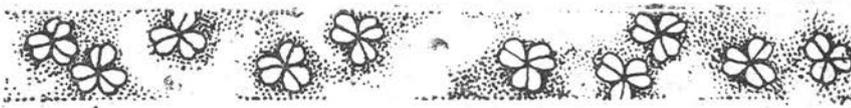
「それで、こんざは大道に出て、おつと人目を忍んで私の生徒等のための毎日のパンを紙漏斗に集めてやるほかに方法がなかつた。私はそれをやつた。恥ぢもなかつた。時には好運が舞ひこんで来る。シャトオルナルやバルバンタの野菜物をアツイニカンの市場へ持つて行く驢馬が、私の門の前を通りながら、其の淨財を置いて行つた。かうした棚から落ちた牡丹餅は、すぐ集め取られて、幾日かの間私を豊富にしてくれ、一言で云へば、一塊りの糞のために私の事をしたり、探し歩いたり、走つたり、外交をやつたりして私は私の捕虜を養つて置いた。若し成功さふものが其の仕事に對する熱心と、そんな事でも厭はない愛さによるものであれば私の實驗はきつと成功したのだ。それは成功しなかつた。暫くするに私のスカラベ共は、あちこち廣く歩き廻る事の出来ない其の虫籠の中で懷郷病にかかつて、其の秘密を私に見せない前には死んでしまつた。」

さ、述べてゐる。こんな失敗を幾度か繰返へしたが、此の科學者は決してひるまなかつた。この大虫籠の試験を一緒に直接の搜索もやつた。そのためには、兵隊の射的の彈丸を拾ひに、隣り村から来る學童を買収した。彼等は學校で恐ろしい折檻をうけることを忘れて幾つか拾つて一錢にしかならない鉛の彈を拾ひに来るのであつたが、それ等の子さも遂を誘惑するために彼は若し虫の餌をわけてゐる糞玉を一つ拾つたら一フランやるさへ約束したのである。

かくして彼は次の木曜日から「フランスの小學校では木曜日と日曜日とが休」同じ場所へ同じ時間にあつたので多くの學童と共に糞玉の發見につぎめたのであるが、これも又失敗に歸したのである。探し手もがつかりして、しまひには幾人もなかつたが彼は最後まで熱心で彼の助手をつぎめてくれた子供等にいくらかの報酬を與へてその約束を解いた。「かくして私は、ちよつと見ると、ごく單純なやつだが、しかし實は非常に難な此の研究に、私はまだ私一人をたよらなければならなくなつた。」

云つてゐる。斯うした彼の苦心談なら幾ら書いても盡きないのである。彼は昆蟲の生活と、その本能を研究するために四十年間を費やしてなほ飽きなかつたのである。私は最後に彼が、その著「昆蟲記」の序文の冒頭に述べてゐる言葉を紹介しなければならぬ。

「私は此の「昆蟲記」の決定版を公けにすることにきめなければならぬ。もう老衰して、力がなくなつて目は弱り動、こゝも殆んど出来なくなつて、何んの仕事の方法もなくやつた私は私の壽命がもつと長びくもさ假定したところ、今後此の書に更に何物かを附け加へることは出来なかつたと思ふ。」云つてゐる。彼は目も弱り、殆んど動くことの出来なくなるまで研究をつづけたのである。世界的博物學者のこの悲愴な言を讀んだ時、川柳に精進する私は涙ぐまずにはなれなかつた。



近  
作

麻  
生  
路  
郎

お元日坐るきころへ坐らされ

□

老妻をいたはる汽車がつきにけり  
黨のため海鼠になつたおそろしさ  
俺は彼を莫迦にしてやらう

自  
嘲  
（二リ）

入齒の金かねをおごらされたおかしさ

□

中谷秀一君を悼む

時雨れてゐるよ君はなぜ黙つてゐる

戸張孤雁氏逝く

裸女の線にも悲しみのただよへり







芋虫の跳躍みれば蟻がゐる  
 龜の背で暫し霞がおどるなり  
 時計にも少し賞與をやらうかな  
 帯にかくした處女のひめ事  
 お月さんあなたはセンチメンタリスト  
 同じ嘘言でももう少しうまく云へ  
 そんな管御座いませんミ主を褒め  
 持ちかへる傘に二人は入れ替り  
 安逸をむさほる門に巡查立ち  
 失敬な俺の心を忖度し  
 自轉車に埃がつもる松の内  
 糸屑をくはへて居るも姿なり  
 夜學校電氣の笠がみんな無し  
 二學期も同じ改札係居る  
 よく止る時計で我慢するのなり  
 鼻筋に額に冷たい女にて  
 口先で何うにでもなる氣の弱さ  
 弔文に主義變節の事はなし  
 剝製の鷹は只眼が光るだけ  
 料理法そんなお金も暇もなし  
 おれを前に酒飲みはもうこりくだ  
 病人ミ手をさりあへば咳きいりて

大 同 同 同 鳥 同 同 大 同 同 魚 同 同 大 同 同 神 同 同 大 同 同  
 阪 取 阪 崎 阪 戸 阪

鮎 同 同 同 聽 同 同 冷 同 同 亂 同 同 炭 同 同 志 同 同 靜 同 同  
 美 松 笑 耽 車 郎 雲



美しくいものに見飽いてゐる乞食  
 ぶしつけな戀を笑ふてやつたまで  
 赤さんほ柵から一寸汽車を逃げ  
 出勤さ電車で遇つた旅姿  
 灰餅南京豆が二つ出る  
 くれだのさ違ふバザアの切符なり  
 出雲屋の煙にむせる母を連れ  
 書留に米洗ふ手を止めさされ  
 可らずさ勿れで通す文部省  
 病人は明日降る雨を知つてゐる  
 責任は無い事にして少し出し  
 しんみりさ話すに女聞きもせず  
 悪人をうまく逃がして幕が下り  
 怒つてる心みんなを遠慮させ  
 友達の一人女優に憧がれる  
 黒豆ミゴマメが残る松の内  
 經文を母があけるさ有難し  
 病人の願ひカーテン明けられる  
 辻占賣きけば四谷さだけ答へ  
 界限に夫婦喧嘩で知れ渡り  
 七年忌又あの虫の鳴いてゐる  
 新世帯光つた鍋で知れました

同 同

根 府 阪 江 阪 日 京

同 同

冬木立 愛波 よし江 花孤 蒼梧樓 新水 鳴穂堂



下宿屋へ来た見さんのふけて見え  
 定宿で芝居の留守を頼まれる  
 明けてはや八十になる松の内  
 お妾も猫も目出度き松の内  
 亡命を日本たしかに引受ける  
 温泉の膳に山々暮れて来る  
 ヒステリーに成つてる事を知つてる  
 自轉車の音は腹立ちまぎれなり  
 交又點今度は俺まぎれなり  
 電話口怒鳴つて見れば話中  
 齒車に巻き込まれたる夢を見る  
 看護婦の本を病人見たくなり  
 警察は同情もして言ひ聞かし  
 果して果して父は叱らず  
 尼になる心懸けとも思はれて  
 大戦のころの愚かを嘆かれて  
 縮入のまだく早い重さを着  
 人通りみな鏡屋へ這入るよう  
 初雪に國の寒さが思はれる  
 不景氣にマルクスだけは賣れてる  
 淋しさは猫の足音聞えて來  
 生きねばならず偽の手を合はせ  
 受験待つのに兄の子の守をして  
 磯釣りは暮れたまんまの町へ入り

同 島 同 同 同 同 神 同 同 西 同 同 大 同 同 山 同 同 大 同 同 兵 同

根 戸 灘 阪 日 阪 庫

同 緑 同 同 笑 同 同 千 同 同 冬 同 同 閉 同 同 吐 同 同 彩 同 同 陽 同

之 助 人 鳥 石 路 露 樓 秋 春









申上げます花道を歩くだけ  
 丙午外に不足はないけれど  
 百貨店兎に角つべん迄のほり  
 浮草の戀を残して女給來ず  
 金のない親にも親の親心  
 うすぐもり着物のがらによくに  
 甘んじて好意を受ける程にすれ  
 ウエトレス強く叩いて笑つて居  
 一つ打つ時計の音にみな静か  
 大入に萬歳少したゝき過ぎ  
 一日も主人のゐらない松の内  
 この腕で働けるかミ出して見せ  
 錢湯の休業の札見て戻り  
 今朝の顔鏡に映す恐ろしさ  
 満腹の隙がにはこりの最後  
 商賣さ思へど矢張り腹も立ち  
 喫茶店で古い夢二の畫を思ふ  
 改札を子供かかんで走るなり  
 子がほしき女房ひそかに願をかけ  
 注連張つて五七五など松の内  
 恩給が子等に衛生説いてゐる  
 酔つばらい乗せて伸屋立つたまま  
 藝者連れ何處でもみやげ買はされる  
 合點がいつたで地圖は疊まれる

兵庫 姫島 魚崎 大坂 輪島 神戶 大坂 神戶 満州 神戶 小松 盛ヶ池 大坂 兵庫 福岡 盛ヶ池 大坂 姫島 大坂 兵庫 大坂 別府 大坂 島根

珍竹郎 二狂雨 遊雨 梢を 眞公子 燕柳 郊明村 草明 寸馬 邦文 幸泉 嵐爽 無眼 玉政 默耳 觀月 靜香 香行 鯉友 晃卓 秀郎 笑太郎



# 川柳の本質

田中辰二

紫の花 紅の花が咲き匂ふてゐる所には紫の詩、紅の歌も流れよう。なごやかな天氣の中に靜かに息づくものに、いだいしさ、惱ましき、もごかしさは考へられない。明るい、ひれぎも何處か軽い江戸の世界に、明るく而も軽い川柳てふ文學が數多い民衆の心から滲み出た事は考へやうによつては當然すぎる程當然なことであつた。

江戸の世界は恐ろしく明るい軽いものであつた。敢て言ふ。それは離れてゐるものが美しく見ゆる我々の一つの幻想である。思はない。無論微細に眺めれば其處に、ぎごちない不愉快な影と多少はありし、あの平安朝の貴族生活に漲つてゐたやうな雅かさ、匂ひ、あはれささはかけ離れた。こまじさあつくるしさもあつたには違ひない。併し無執着や恬淡に馴らされたサムライの都に生育し、四里四方の天地から一步踏み出せば

土下座を強要する町守、大名、小名さへも小心翼々として仕へてゐる將軍のお膝元にある事に誇りを感じながら、術數や權謀にこね合された政治から全く隔絶すべき運命を甘受した人々にまつて、江戸の世界はさ暢氣なものは無かつたであらう、殊に武士程拘束を受けず生活苦もすくなかつた町人階級にあつては猶更の事であつたらう。

既に生活が暢氣であればそこに憂愁の影を見出す事はない、却つて一日でもより面白く楽しく暮してきたいと云つた欲求も起つて來よう。武士の眼からは淺ましく見えた教養のすくない町人はそれだけ現世の愉快を求めるところが烈しかつた。想像される。抜語や開帳、淫祠の信仰さうしたものが時に盛んに起つたのはそれを如實に物語つてはゐないだらうか。

が神佛に祈願をこめたり巷間の迷信に基いて行動をまつても

かの王朝時代に貴族のこり來つたそれは、すくなくも色彩を異にしてゐる事を認めずにはゐられない。彼は何處さなく裏にしみつほきを持つてゐる、世が無常迅速であると言つた根本思想の上に建設された弱々しさがある。王朝貴族生活のパノラマである、源氏物語の薰大將や宇治八宮の生活を觀よ、世から離れることによつて安心立命を得ようとする心情が著く盛り上つてゐるでは無いか、否暗い淋しい宇治十帖を離れて光明的な華やかな光源氏や紫の上を觀ても一抹の弱さがあり、よし理想は實現しなかつたにせよ出家したいと言つた欲求を眞劍に洩らしてゐるでは無いか。入道は精神的肉體的苦惱の唯一の慰安であり逃避方法でもあつた、薄雲女院、女三の宮、浮舟、曰く誰の物語中の人物でそを物語つてゐるものも明かに見ゆる。現實の貴族や女房達の中にもさうした心持は多分に持つてゐた、時には清少納言のやうな遊山佛教の信者で法華八講の席で公卿なごを凝視し觀察してゐる者もあつたであらうが、多くは華やかな非嚴な八講の中にも弱々しい惱ましい逃避的遁世的な氣分が培はれたであらう。くす師より陰陽師が尊ばれ、加持祈禱が病に對する最良の手段であるを考へた時代であるだけさうなるものも不思議はない。

江戸の世界も佛教の信仰やその他の迷信が根強かつた、が其信仰や迷信は入道し遁世して安心立命を求める底の眞劍味からで

は無く愉悅を續けるべき現世にもつて執着してゐたいからであつた。金が物言ふ世の中であり、神佛も金錢の爲に開帳し金錢には押され給ふ世の中を觀じては其の一般の信仰程度も大方想像がつく筈である。遊山信仰・虛榮信仰・慾張信仰、さうしたものを引き去れば残るものはいくらも無いのが江戸の信仰では無かつたか。

- 銅佛は拜んだあこでた、かれる
  - 辻切を見ておはします地藏尊
  - びじ、門はからしのきいた顔つき
  - 不動さまうれしれも無いお貌つき
  - 江戸へ来て役者をすのむ神佛
  - 箔つかぬ内は衆生に手を合せ
  - 觀音も不動もくらひ道具也
  - 觀音の千の矢先に五百うそ
  - 如意輪は工面の出来ぬ御すがた
- (柳 初篇)  
 (同 二篇)  
 (同拾遺、寶曆)  
 (柳 七篇)  
 (拾遺、寶曆)  
 (同 同)  
 (同 同)  
 (同 同)

こんな類句は非常に多い、されを見ても平安朝に見られる如き惱ましき靜かさ暗さは無くて徹頭徹尾軽い明るい氣分を浮べて江戸の信仰の一面を曝露してゐるやうな氣がする。ひざりすべてを客觀的にこり扱ふ川柳のみでは無く恚うした氣分は江戸文學の種々な方面で發見し得る。多少の誇張は伴うとも川柳がまた時代に反逆的な藝術では無かつた事を證據立てるやうに。

明るい軽い江戸の世界に生れた川柳が反逆的な藝術で無いことしたら、その明るさ、軽さが川柳の大きな基調となつてゐる事も考へられねばならぬ。實際川柳の勝れた作品には此の要素が

多分に含まれてゐる。明るさは光りの意でなく暗さに對する明るさである。複雑さからシンプライズされ幽鬱から救ひ出される平明さである。

唐の繪はれまきのまゝの女也

(拾遺、寶曆)

こつていさした唐の繪には種々雑多なものがあらう。その中から抽出した女性の姿態、それにも毒々しい色彩や濃厚な衣裳がつけられあつくるしい感じがわれ等の頭には浮び上つて来る、而も此の川柳句はそのあつくるしい姿をねまきのまゝ云ふ輕い一語で何等のこだはりも無く片付けてゐる。

ちさしめてくりよう親仁嬖すに居る (柳樽六)

息子に對する親仁の頑固さ、それを表現する文字は多様であらう、殊に自墮落に陥る息子に對しては猶更の事であらう其中から父親の叫ぶ一語を引き出して來て其の心持を如何にもクリーヤに描き出してゐる。

銀させる銀のやうださ親仁云ひ  
人は人なせ歸らぬ親仁云ひ  
まだ床がさめぬ親仁おつかける  
すれば基ちや無い親父ももう悟り  
花を見てそして親父むつかし  
两眼くわつこ見ひらひて親父まぢ  
面白くないは親仁が尻目なり  
おれが目をねむつたらば名句なり  
そこで親仁が腹を立後の月

(柳樽七)  
(同) 九  
(同) 九  
(同) 〇  
(同) 一  
(同) 二  
(同) 四  
(同) 五  
(同) 五  
(同) 五  
(同) 八  
(同) 五

すらく描いて其の面影を如實に出してゐる。そして其の間にもわざとらしい技巧のあまを見出す事もすくない。頭からがみ／＼吐りつけ、父親の心になれば事實その場合波立つのを覺ゆるであらうし吐りつけられる息子の身にこれば何さなく後暗い心持をいだかすにははるらないであらう。が、作者は決して波立つたり心暗い心持を持つてはならない。すべてを容觀の世界に投げ入れ、置いて虚心で氣淡々たる中にそれを表現しつくる。そればかりが讀了した後にもねちつこさは無く暑苦しさは無く大風一過まことに朗かな空を見るやうな感がせざるを得ない。父親が既にかく描かれてゐる、その父の一喝を恐れながらも朝歸りする息子の姿態滑稽云へば滑稽、不憫云へば不憫であらう。が之でも同じくそのまゝの現實をむき出しの荒削りのそしてうぶな腔の中に描きつくさうしてゐる。

朝がへりす、きの穂にもおちるなり (柳樽一〇)

朝がへりあしたに道を聞いてゐる (同 一一)

臆病者は薄の穂にも怖ぢるこいふ 朝に道を聞かば夕には死すも可なりさやら云ふその慣用語句を箱めて來た所に此の句がすこし智的に流れてゐるもの、矢張り明るい氣分を失つてはるない。若し川傍柳初篇の

朝顔を親仁見てゐるには困り

或は柳樽十一篇の

朝かへりだん／＼内へちかくなり

に到つては其の無技巧な表現のうちに行かざしての明るいうま味が多分籠つてゐる事を見のがす譯には行かない。

と同時に我々は此の何でもなく率直に描かれた短詩の中に、何處までも執着しようとするのでは無い淡さを認める、

物申を娘は奥へしよつて逃げ (柳樽拾遺、明和)

じかられて娘はくしのほをかぞへ (同 同)

難の酒みんのまれて泣いてゐる (柳樽 七)

かけて來た程に娘の用はなし (同 一一)

これにも淡さは見出されると思ふ。否、怒うしたもののばかりでは無い、濃泥であるべき戀愛の諸相をも短詩型にふさはしいやうな表現で淡く片付けてゐるものが多い。

うれしさをさりかへさるゝ鐘の聲 (拾遺、寶曆)

物思ふ身をたてかけけるはこはしこ (同 明和)

うちはでは憎らしかけるは、かれず拾遺、安永、柳樽、初筈)

手のぐひのよりをもとすは出來た奴 (拾遺、天明)

うつむいてかくかんざしは物になり (同 拾遺)

來た顔は文のうらみの十分一 (拾遺、寶曆)

わが思ひせめて樂屋ですり違ひ (同 寶曆)

あいばれば顔へ格子の跡がつき (柳樽、初篇)

相性は聞きたし年はかくしたし (同 六)

にざられた片手疊をむしつてる (同 一四)

之等のこれを見てもこつてり盛られてゐないで軽い悟りもでも云はうか微かな超越味までも言はうか一種云ひ切れぬ淡さが見ゆる。

此の淡さは川柳の上乗なもののほぎよく表れてゐるが一つは江戸人の性情の反映である事を思はしめる。實際江戸人は一面に淡き心の所有者であつてそれはすくなくも禁慾の土臺に築かれた武士道が武士から遊女へ遊女から町人へ流れたからでもあらう通人さか粹人さか云つたものほぎものに執着をもたなかつた事はさうした徑路を物語るやうな氣がする。其の考證は此處では述べぬがその淡い心持は種々な方面に澄み出てこそこつてりさした描寫を廢し比較的あつさり片片けるやうな傾向を表現の一面にあらはしたのではないかと思ふ。若し然りすれば川柳はすくなくもその傾向を代表する事が出来るほぎ淡い中に歌はれてゐるのである。

明るさ淡さは輕快味の大きな要素であり又その一面さも云ひ得る。従つて明るさ淡さを多分に持つてゐる川柳が他面に輕快味を持つて不思議は無い。川柳の輕さの前に述べたのは輕薄輕卒の意味でなく此の明るさの上に盛り上げられた輕快味の義である。云はでは腹ふくると思ふこころを卒直にすつきり云ひ切つて仕舞つての後に來る肩のこらめ快い感じである。

なぐさみに女房の意見聞いてゐる (柳樽 二)

女房へ乳だ／＼とおつツける (同 三)

たま／＼はよいと亭主は太く出る (拾遺、明和)

絲卷の向ふに亭主おごつてゐる (同 拾遺)

朝歸りさりちげばどに叱られる (柳樽 五)

(六〇頁へつゞく)



漫 詩

これは不思議ではないでせうか？

女中さんお嬢さん

長 野 晴 濱

私はいやなものを見た、不思議なものを見た、百貨店の食堂だったが。

四人の若い婦人が来た。

この四人は明確に三人と一人とに別れてゐた、

三人はお嬢さんたち、

一人は女中さ。

三人の組はしきりに話し、笑つた。

つゝましやかさを破らぬ程に、

若い女性らしい晴々しさで笑ひ、話した。

このお嬢さんたちは、

中々どうして、わるい子たちでは無かつた。

一人の組は黙つてゐた。

いや、これは本統は一人ではないのだ本統いへば大多数なのだ、

寄生するか搾取されるかしなければ生

存を許されてゐない、

大多数の代表者なんだが。

だが今の場合一人である所の、

女中は黙つてかけてゐた。

やゝ熱鈍かと思はせるやうな眼を開いて、

離れ島のやうにほつんとしてゐた。

おまけに女中の腰かけた膝には、大きな風呂敷包が乗つてゐた、

榜間の石のやゝに、

馬の背中の鞍のやうに。

洋服、束髪、錦紗、口髭、眼鏡、指環  
尤もインバネスに帽子も冠らないで歩  
き相な、

然うした氣安い人達もあるにはあつた  
が、

でも食堂の空氣は女中にまつては窮屈  
なものであつた。

おまげに御主人の前でもあり、  
おまげに食べつけないものに向はされ  
るのでもある。

女中は少しおびえてさへ見わた。

女中の御主人とそのお友達二人とは、

明かに女中の存在を感じなかつた。

卓に、咫尺の間に相對しながら、

四人は二組に別れ、

三人と一人の各組は、

すつかり別の世界に生活してゐた。

而かも不思議なことに安住してゐた。

嘗て六甲のホテルで私は同じやうなも  
のを見た。

それは西洋人の一組であつたが、

やはり女中は御主人たちの群から存在  
を感じてゐられなかつた。

そして御主人たちは、

その感じない事に少しも氣附いてゐな  
かつた。

それ程女中と御主人たちとは別々にな  
つてゐた。

ニュートンは林檎の實の落ちるのを見  
て不思議がつたと傳へられる。

上にあるものが何で下へ落ちる？

先づ不思議を感じる、

それが一つの發見だ。

お嬢さんがたにも申さう。

あなた方は女學校も卒業したらう、

質素、勤儉も教へられたらう、

謙遜の美德をも聽かされたらう、

溫良、貞淑をも注込まれたらう。

現にあなたがたは傲つてはゐるなかつた

びか／＼したなりなぞしてゐなかつた

ちよく／＼の外出を思はせる秩父の、

柄のわるくない、古くないのを着てゐ  
た。

いや一人の人は餘り新しくないのをさ

へ着てゐた。

さうして／＼あなた方は俗に謂ふ奥床

しくさへあるお嬢さんたちだつた。

あなた方の中には親に孝行な人もあらう、

心の貧しき人もあらう、

神様に、佛様に、信仰を寄せる人もあらう、

下々に丁寧で深切でやさしい人もあらう、

謂ふ所の修養に始終心がけてゐる人もあらう、

人道主義の人もあらう、

新しい思想などをよく理解してゐると思つてゐる人もあらう。

だが、だが、お嬢さんたち、

私は聲を高めて言はないではゐられない、

何であなたがたは

眼前咫尺に起つてゐる此の不思議を感じないのか？

女中さんにももの申さう。

あなたは女學校へ行かなかつたらう、

お花、ピアノ、お琴、お茶、運動、長唄、

仕舞のお稽口をしなかつたらう、

避暑避寒地での、長閑なゆたかな「時」の使ひ方をおほわなかつたらう、

きん／＼した所へ出る事も知らなかつたらう。

あなたの教はつた事はあなたの御主人のやうな人々を別世界にゐる事だつた。

其處に安住する事だつた。

分を守る事だつた。不思議に對して目を閉ぢる事だつた。

だが、だが、女中さん、

私は聲を大きくして言はずにはゐられない。

あなたご御主人たちのしてゐる事は、ごうも、實に、不思議ではありませんか。

あなたの目前に起つてゐる其事を、

何であなたは不思議に思はないのですか。

斯ういふ事は世界中に、

毎日毎日、朝から夜まで、尋常茶飯に起つてゐる事であるとは云へ、

それはごうも餘りにも不思議ではないでせうか？



# 時代川柳大觀に就て (上)

岡田三面子

ひるがへる袖へうすめの日があたり

のはにの誤

三頁

戸隠は手のはいるを開くを待ち

はいるをばはいし程の誤

四頁

蜘蛛八重垣いづれ妹背の大和歌

重垣は誤、同書二九頁 蜘蛛八雲が正

七頁

けいのうにせつせざるが猿田彦

げいのうにたつせざるのが猿田彦

八頁

せり出しの山を近江の細工なり

富士の句には相違なきも、芝居の道具近江のこ

二頁

後姿を見せぬは咲耶姫

み説がねば判らぬ人が少くならう

三頁

時代川柳大觀とは、森田陽東氏著武笠山椒氏関春陽堂發行の  
 詠火川柳狂句集のこゝである、此の種の編著は、今井卯木氏校  
 訂大野露草氏編纂大正元年十月發行の「歴史三川柳」あり、部  
 分則ではあるが、西原柳雨氏著大正十五〳昭和元年十月發行の  
 「川柳藝尾志」一名川柳戦國史あり、又唐土上代の一部分は、  
 昭和二年六月甲陽堂發行拙著「虚心觀」三五四頁乃至四二二頁  
 に載せてあるが、其の範圍の最も廣く、従つて採收された句も  
 最も多いのは、右の時代川柳大觀である、該書に載せられた  
 句の位置又は解が、或は誤つては居らぬか、それとも私の思ひ  
 違ひか、大方の示教を仰ぐ爲め、左に掲出します。序に氣附い  
 た誤植なきをも擧げることにします。(略字標一七三七三は柳  
 標第十七編三七丁第三句の事、一丁は十八句であるから一〇以下は其  
 丁の裏あり)

かぐや姫俗名おふじ様といひ 一八頁

かぐや姫はさくや姫の誤 一四頁正、權五・九・一

天人もはだかにされては地ものなり 三〇頁

はは衍 權初・三〇

大和屋たけご申したき御仕打 三三頁

役者に見立てるさの解も、一通り聞こへるがた

ゞ女装のこさを指したるにてはなきか

九十ぬけても馬鹿でない軍師なり 三四頁

武内に關係なく、九六、百文の九十抜けた、六

文錢の定紋眞田のこゝも、思ふ

我が夫のうごいふうちしやつきばり 三五頁

いふうちに？

じやまな石よるは一人でかなしがり 三三頁

佐用の音はあるが、松浦瀛でなく中山夜泣石。

重いからんなご、善光おぶつさり 三七頁

重いかへなご、善光おぶつさり權一八・四一・一七

めかりのきいた神・職が鎌の役 三六頁

文字が關、隼人の社十二月三十日和布刈の神事

の句、鎌足に關係なし

螢より蜘蛛よんだは吉備がよい 三三頁

蜘蛛の誤にてはなきや、出所が不明で不明、

橋をかけ船にも蜘蛛は乗つて見る 四三頁

不明、垂教を乞ふ

貞操の腹に碁石のぬすみもの 四三頁

目を白く黒く一目かくしのみ 同

唐帝の後ではないと記憶するが、誰であつたか

を思出せぬ、教へて下さい 四四頁

我國の耻づかしくない歌をよみ 四四頁

仲鷹でなく、宗任の梅の花らしい

和歌は柿詩は李がよく熟し 四四頁

脱字あらん

ほのくに一群ねりの出舟なり 四五頁

ねりは練り、殿女の芝居又は花見か？

身の光りさすまで垢をすり 四五頁

脱字あらん

切先は雨やあられど田村川 五三頁

切をそろへてわたる田村川 同

第二句切先の先の字を脱す、謡曲田村文句取、

鈴鹿山の麓の田村川と同時に、相州中郡、大山

参りの途中にある田村川を利かせた句構

弘法のふりで四五日喰ひたほし 六三頁

句意不明、教へて頂きたい

龍宮は何だか土産くれるまこと 六三頁

だかはぞかの誤

管公この度は筑紫だまご時平しやれ 六三頁

管家の誤りでなきや

悪筆へまつてくれろは能書なり

五頁

不明

物忘れすなご梅へ御神詠

四頁

脱字?

天神へ飛梅あたごなぐれなり

五頁

愛宕の土器なげさ云ふ事を知らず

文學盛ん梅干極安し

五頁

不明

ぬれ衣を不知火ほし給ふ

七頁

脱字?

告文もあつたら御手に書きおさめ

七頁

もさに誤りはなきか?

御諱も和歌も道の眞なり

九頁

脱字なきか?

五月雨に東三條の通りたえ

一〇三頁

嘗て此の句を羅生門かとも思つたが、餘り隔ち

すぎるが、法性坊一件さしても少しく不安

大臣せきこんで松をつれ蚊帳をつれ

一〇四頁

松をつれ不明

不運まで天に有たぬは時平なり

一〇五頁

僧正の外は三階を宿とする

一〇五頁

二句共さつぱり判りませぬ

うちまきが下つたものご小町き

一二九頁

下つたの、下つたかの、か脱字か、關寺でなく

一一九頁以下の兩乞にあるべき句。出所明和五  
千年萬句合仁二裏

ながめせしまに老いくちる芥ご小町

一〇〇頁

小町は小野の誤

叡山のあてゝ前日一つ鳴り

一三三頁

菅公の句、將門の叡山に關係なし

一生を汁かけ飯で見限られ

一三六頁

飯を零ぼした將門も解せられるが、不安

緋の法衣式部に居所うばはれる

一四〇頁

諺に紫は朱を奪ふさいふ註、諺でなく、論語陽

貨第十七に、さありたし。

紫の中へ出家が一やすみ

一三三頁

式部でなく、紫野の一体和尚、此の句の頭の註

を前の御法の句の分

枕さうしを書き手でみすをまき

一五七頁

書きた、書いた手か

樽五五・二〇表

袴乗馬さろほうでみそをつけ

一六三頁

樽三一・一六・一の句だが、馬さろほう不明

箔つかぬうちは衆生に手を合

一六四頁

性空一普賢の事に限らず、一般の佛像の事と解

すべきではなきか

硯から誤つて書寫を御建立

一六六頁

不明

娘のかみ酒吞童子の時に出来 (以下次號)

評 郎 路  
書 舟 柴

# ろ こ ご 女

柳 川  
畫 漫

その上を値切るも女心なり  
迷 村

「まいご御最辰になりますので、こちらの方ですご特に勉強いたしました〜幾らく〜にいたしておきます」

「オヤ〜そんなにまかるものかしら、こんな調子では未だ少しは何んじかなるに違ひない」

「ご更にその上を値切つて見るのも女にはよくある圖です。この品で、この値段ならば買つても決して買ひ被つてゐないといふ事が、ハツキリする迄はなかく容易な事ではありません。高いからいゝのだらう位に考へてゐる婦人が随分多い様に見受けられます。」

しかし値切るこを知らない時代が女にミつては花なのでせう。



寝てこます氣か女房は帯を解き かほる

「あいつは妻君を貰つてから、少しも顔を見せない。あいつも矢張り凡人さ」

友人間で鬼や角云はれてゐた男も、

日数が経てば、さうく妻君の顔ばかり

眺めてもゐられないと見れて、ちよ

いと歸りが遅くなる。

時には泊つて来るこもさへもある。

古句に「いつたのさ莫迦々々しいミ

内儀寝る」ミいふ句がありますが、こ

れと恰度さうした場面を詠んだもので

す。艶消しの電燈が、あるじのない部

屋を無駄に照してゐる下で、ほつねん

ミ待たされてゐる最愛も、長火鉢の湯

のたぎん音にさへ腹立たしさを感した

のか、遂に立ちあがつて、帯を解き

かゝつたのである。今夜も多分お歸り



あまのこ

似た者が夫婦と餘所をけなすなり

柳 路

よその花け紅いといふ言葉がありますが、一方では又よそのアラは針ぼごの事でも棒ぼごに見ゆるものです。夫婦の間に話題がつきるに、つひ餘所のこころを病氣に病んで、なんじかかんじか云ひたくなるもので、

「あのお向ひの御亭主さんは、大酒呑みで、怠け者ださうですよ。あれでよく家もてるわね」

「今更のやうに云へば、

「あの妻君も妻君ぢやアないか。碌なものも喰べてるないくせに、錦紗の着物なんか着て、一日ぞべくくしてらんだから全く見てゐられないよ。朝寝坊で早業坊なんだから、今に落城しろものさ。」

と答へる。

「似た者夫婦つてよく云つてあるわね。枯れて落ちても二人連れ口なんですせう」

「夫唱婦和。自分達も又似た者夫婦であることに氣づかないのも人間の弱點か。」



柳路

見榮に云ふ嘘に女はしゃべりすぎ

逸 錢

女は目榮坊は昔から大の仲よしです。電車に乗つても、わざと三越の包紙を膝の上に載つけて、いかにも「妾のうちでは三越でしかお買ひ物はい

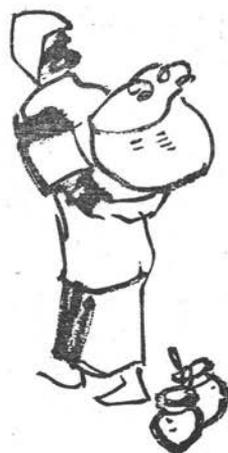
たしません」云つた風の態度を示しがります。三つておきのダイヤを電車の中や、お芝居の中でピカ／＼見せつけてゐる婦人達さへあるものです。他の婦人がそんなことをしてゐる場合に反感をもつものは、矢張りさうした婦人なのです。

「まあに、成り上り者のくせに生意氣たわね」

さよとおつしやいます。目榮から生れる嫉視をよく見せつけられますが、さうやら除り、見良いものではありません。目榮さへ張ねば、ほんまに氣樂なのに、うつかり目榮を張つて、三越がさうださか、帝劇がさうださか云ひ出しますさ、それにつりあふ生活をしてゐない婦人達は、勢ひ何んにかバツを合はさなければならなくなつて、非常によく多くの言葉を費すものです。第三番から見れば全く滑稽です。それを詠んだ軽い穿らの句です。



はな  
お



# 川柳塔

○ 妻洗禮を受く 安井ひろし

神の家に酒飲む夫うとまれる  
友肺を病む (三句)

肺患の父は知らず子は肥り  
肺は知れ貰ひ水する戸もたれ  
病ひが病ひで家明け云ひつかり  
ビロードの襟深々一人寝る  
風の音かはいて板間寒い車  
四疊半ひかれぬ琴が邪魔になり  
北風に水菜や大根炊く夫婦  
あの分はいつ頃になど十二月  
休銀に預金もなくて年の暮  
○ 龜井花童子  
縛られるやうに拾へ帯をしめ

二等車の輿論を聞いてペンを出し  
まだ起きぬらしく勝手に乳の壘  
思ひ出に弾く琴爪のぬけかゝり

○ 矢田右大臣

日本は米のなる木の中を汽車  
人間味なきあらばこそ金が出来  
百貨店その屋上へ子と父と

○ 庄萬よし

大衆さゝもには餓ゆることよし  
突つ放しといて後から見わかれ  
面會が怖いのじやない暇がない  
籐椅子は塵積んだ儘暮近し

○ 酒井駒人

家出したのを理解する若い叔母  
爪を切る母へ隠居の日も近し

立腹のまだ解けやらで夜のめし丸髷の炭切るだけに鋸を持ち

○ 西本 三 笑

月足らず云ふを父親抱いてるる角帯で我をあざむく世辭が出るいてゝゐる道もうれしいお正月座蒲團を足でなほして冷えることどんぐりの涎に女あはてゝゐる

○ 安西 杏 三

正月を施料患者のチトはしやぎぬぎ棄てた着物の影に夜の深さ一瞥に寸断されし自尊心もの皆んな焰になつて我を焼く病院の廊下走つて見たくなり聞こゝてゐるのではあらうが聽診器

○ 北山 悟 郎

友仙を着た喜が最後なりしか就職の今日ネクタイを締直し嫁入の荷物見とるゝ娘を持つてむつかしい人に世間がしてしまひ大病の時から兄弟みぞが出来

○ 岩崎 柳 路

晝行くに今日は結び日で女居す

日本銀行で怖ろしい金を見るテケツから酔うて居るなと思はれるあんなレベルの低い奴はさげなして居鐵橋で蜜柑の皮を投げて見る

○ 尾添 雷 相

だまされて火山のやうな怒りやう考へてゐる筈の子が眠つて居

○ 中澤 濁 水

洋服を着替へて印を忘れて來これからが橋ですこいふ灯がさほり抱いて吸ふ煙草の烟を見がおさえ自動車に顔顔顔と優勝旗便所なら證據をおいて行けさいふ活動のレター手品のやうに書け

○ 横田 眠 聲

みな遊べ遊べ三の糸を締めほこくミ炬燵はぬくし情話本悲しみの極線香に火をつける自暴自棄わたしや妾になるつもりジャズバンド捨子云ふが踊つて居今朝の屠蘇兄の行方はまだ知れず

○ 松盛 琴 人

お荷物にされても知らぬお人好し

木版屋見て居る方の肩が凝り  
泳いでるやうに案山子は見ゆるなり  
彼の方の旦那かごそを覗かれる  
盗まれて居るご知らずに芝居に居  
恩給へ靴が虐待受けて居る  
空莫へビクリくと鼻毛抜く  
次の瞬間を考へる閑人

○ 麻生 豊 乃

無念無想どころかせはし一心寺  
呑み屋程顔をおほえぬ經木書  
新春の青疊なご分にすぎ

○ 太田 朝 陽

三つばんに炬燵の消えた事を知り  
電報に結榮々のする旅すがた  
入營にさもりも一人交じつてる  
子供等よ此の籠の鳥よく見さげ  
骨抜きにされて新聞電車まで  
賃鴉をジツと見てゐる懐手  
白襟は密柑を割つたまま話し  
○ 高見 柳 骨  
化粧して待部屋長し夜も長し  
まかり違へば殺して終ふ氣で戻り  
きつしりご座り子供のませた顔

○ 本田柳 一路  
がす燵のかずを忘れたよい機嫌  
知らしたが来る間仲居も捨て難し  
○ 橋本 二 柳 子

そんな事あつたかいなご男也  
風が吹く膝くすしても風が吹く  
長火鉢對手がなくて眠らない  
轉任に落ちつきもせか先のこご  
元日や父ご養子の禮儀にて

## 粒々集

○ 蛭子 省 二  
さうふ屋へつりを貸し雨の精進日  
約束の路次の太鼓が仇敵  
仕事着に才ありあまる汗をかき  
膝頭だいて胎むだ妻をみる  
表札のローマ字めでて蟻をまたぎ  
二階に居る日干大根の争ひ  
保険屋に帯むすばせて土いぢり  
酒の後の顛やせて轉趁握る

○ 安川久流美

さすらひへ今誘惑の夜が来る  
自殺せず俯向いて歸りけり  
瀧も見ず紅葉も見ずに砂を見る  
犬の手を叱つて土に親します

○ 塚崎松郎

觀方にもよるさなかく負けて居す  
行末を女の襟に見いだしぬ  
手土産を持つて凡夫へお辭儀する  
惚れられて自分の年の恐ろしき  
ましまらぬ戀なれば眼もつぶれかし  
ひとりものに誰れがしたのかあゝ寒むや  
そうぶつに二品品はあきれたり  
人臭いとこゝろで金をためてゐる  
一ト言がみんなに母へたのもしき  
小春日和鯛の片身をつくらせて  
糞灰に水かけられし如くなり  
ようこない好きミ嫌ひが合ふたもの  
こしかたを思へば寒しゴマを煎る  
女の金さ合はせなにがしやるせなき  
大根葉出戻りの氣を慰める

○ 中野柳陽

植木鉢伸びる力を抱いて居る  
青空へ精一パイの腕を伸し  
迸ばしる泉小川の音になり

○ 長崎柳秀

急ぐ足にいくらかかれる社會鍋  
相場する養子を親娘持て餘し  
綱しやつは裸でないさ云ふ許り  
斷髪に連れの男は少し照れ  
蚤を挿る女に部屋の明る過ぎ  
薬を焚く嫁は結ばぬ頬冠り  
泣き言のつぎに拭かれる長火鉢

○ 河野春三

疑ひは少しも見えず妻の聲  
子をすかすために電車よ犬の子よ  
ピアノにも遠き計算たてられる  
何これでいゝさ夫になつてゐる  
たゞ未來未來と給仕忍びゐる  
街路樹はつゞく物思ひもつゞく  
病人の聽くスリッパは間違へず



# 川柳瓊音先生

## 蛭子省二

文學士瓊首沼波武夫先生は、遂に長逝された、此世にて英姿聲咳に接し得ざりし余が、さうしても先生を忘る能はざるは、大正六年に『やなぎ樽評釋』を出版された際の、序文の一節である。アノ本は初篇の拔萃ものであるけれ共、最近の通釋の底本となつたもの、當時余も聊か卑見を送つて、寛洪を得たのであつた。序の一節は「熱心に柳樽其他の柳書を研究する人が、なか／＼澤山出來て、専門の雜誌も出來、この句なごは今日ではさうしても、解るまいと思つたのが、その人等の勞によつて、段々さわかつて來たのを見て、私は驚き且敬服した」俳

壇にはそんな忠實の士は殆んどなく、勝手に思つた儘を吐散らして、何々講義なごさ單行本にして、流布されたものが多し、温故云ふ事は、柳壇が俳壇より優つてゐるのみか、眞摯である事に尊敬せずには居られぬ、と記してある。俳界に關係を有し、熱烈な學者たる先生から、斯く感謝の辭をうけた事は確かに誇るに足ると思つたのであつた。

今日尙ほ川柳家の一派が、柳多留を自發的に研究しようともせず、作句萬能主義で、古句に言い古るされた思想、表現には氣付かず、表面描寫を事として、得意満面のなを見るに、滑稽云ふよりは

氏なごの識者に對し、却て恥多きを覺ゆる、先生は名古屋の産、幼年の折り「大惣」の貸本に依つて、柳壇に親しまれたご聞く、余の物心つきし時分は、モウ大惣はなかつた。三教書院の袖珍文庫に、柳壇が加わられたのも先生の御主張であつたごすれば、川柳界から深厚なる謝意を表さねばならない。

茲まで草したま、余は宿疾重く再び立つ能はざるやに迄到つた間に、十月號「國語三國文學」が着いて、一部が追悼録であるを知る、その内の川柳關係の追憶は二つある、守隨氏の「その折々」に

去年の事だつたらう、一高の歸りで、丁度大學迄一處にアスファルトの歩道を歩いてた時だつた「僕はこないだ川柳を一つ作りましたよ」女學生さいふ詞がさうも語呂が悪いから、女生徒と直して

### 女生徒の徽章は臍の上につき

女の學校をやめられて間もなくだつたやうに記憶する。云々

長尾氏の「魂音句集」中

枝豆の豆誤ちつ鼻のさき  
人真似にステツキ持てげ手が寒き

帽手巾を飛ばさぬ首加減

明治時代の分類に従へば、滑稽俳句といふこれらの句に、川柳式なものであることも明らかであり、先生が「柳樽」を愛讀されて、餘技としてさかんに川柳を作られた事を知つてゐるわたしは、先生がある點では、岡野知十氏のいはゆる俳句川柳根本無差別觀に共鳴して居られたと思ふが、先生には又一茶でも川柳でもない境地があつた。

これによるご牛蒡分川柳を作られたらしいが、余の寡聞にして知る由がないのは遺憾に堪へない、茲に大正六年頃の作品に

宿六をこづきまはした事も書き  
自働車はケケケケケと憤り  
線路工夫難なら難いでやつてゐる  
まじない云つてシーザーぶつ倒れ  
満員を追つて見て止しにする  
大それた音でお流し終ひなり  
大袈裟な失敵をすろ羅馬人  
荒縄で残本ひしこ縛られる  
品川は大あくびとして下りる所  
料理法さかく卵の白味なり  
黒頭巾すんばあらずで飯を食ひ  
此の外に浪人吟十七句がある、丁度余も多年變態浪人生活を續けて居るので、實

情と對比してみる事、必ずしも禮を失しはしないであらう。

浪人は眞一文字にものゝ云へ  
浪人はすけすけ錢の事を云ひ  
浪人はめつたに風邪もひかぬ也

世の中には紳士税云ふものもあるが、  
ドン底生活の浪人にも浪人税か遠慮なく  
課せられて、圖書費をくひ込む、肉體苦  
には叶はず樂代丈ひは仕拂はねばならぬ  
余は仲々風邪にも罹る、そして持病が重  
くなら

浪人は洋服を着て座るもの  
浪人の兒は菓子折に飛上り  
余に子供のないのは、造物主の配慮なる  
乎か

浪人の辭書は手澤が存じ過ぎ  
浪人は誰の錢でか旅行をし  
浪人は髪をのげして落をさり  
全くそうである、容易に世に容れられそ  
うもないから、慰みに頭髪が延びたま、  
ほかつて置く、余の髪も仲々長い。

西洋の軍浪人身にこたへ  
二十日過ぎ浪人夫婦不和になり  
此點は透斷してゐる、搦の手は妻、寄せ

手は余、孫子の碑を心得てゐる。

浪人は靴の底見てギョツとする  
洋服浪人であらう、余は大震災以來、服  
を着た事がなかつた、先般某新聞社の主  
幹に聘せられむきして、珍らしく靴をは  
いたが先方の譯から歩けなくなつた、柄  
にないものは履くなミ主張も容れられな  
かつたから斷つて歸つた

圖書館は浪人らしい顔ばかり  
浪人は或夜じみく虫を聞き  
湯上りの浪人少し機嫌よし  
身に一絲も懸げぬ氣分は、浪人でなくて  
は體驗が出来ない。

汗くさくなつて浪人みじめなり  
浪人は古人を友とするに飽き  
生きた人間には表裏が餘りに多い、古人  
を飽きる程友さして、日が暮れてゆく。

先頃の川柳行脚に際し、東京で先生を  
訪問しようかとした一事は、多年その著  
(明治三十三年)『俳諧音調論』を市場  
に探して得られざる爲め、著者の手元に  
訴ふより策なしと考へた、今や先生は喪

く一つの思出になつてしまつた。其多くの著述中『俳諧小品しる椿』と『徒然草講話』を読み教わられたが、二書ともいふ書架から無くなつたか、流浪の身には

# 最初の吉利支丹

……… 拙稿補正 ……

## 木村半文錢

ついたものはない。謹んで川柳東上の先生の名譽に尊崇の念を高め、病中ながら追悼の合掌をなす。

本誌九月號、拙稿『ビイドロミギヤマ』中西班牙の高僧フランシスコ、ザヴィエルの渡來を天文十八年頃だ云つたのは、筆者の早計であつた。其後いろいろと調べたところ、其の説は區々であるが、二三補正しておく。

- 吉利支丹の最初に渡來したのは弘治三年丁巳の秋（吉利支丹由來記）
- 永祿十一戊辰年（南蠻寺秘録）
- 天文廿年九月（耶蘇征伐記）
- 元龜元年（長崎夜話草・長崎志）
- 天文十年辛丑七月（探覽異言・西洋紀聞）
- 天文十二年八月（南浦文集・崎陽雜記）

天文末年（對治邪宗論（天文末錄上卷））  
 あり、最も古きは天文十年七月に豊後神宮浦に來り、同十二年八月には薩摩に來航、肥前半戸に來たのは、薩摩來航の三年後（天文末錄）だあり、何れも是れが確説らしい。因に一説には葡人ピントーが種子島に漂着したのが日本最初の南蠻人來航だといふが、その年は天文十一年だから（ピントー極東遊記）ザヴィエルの來航以後である。  
 織田信長が永祿年中に吉利支丹の永祿

寺（後に大成寺に稱す）を安土城下に建て、その寺に自鳴鐘を懸し時刻を知つたと言ふから、若し此の自鳴鐘に、今日で見ると如く、硝子を表面に嵌めてあつたならば、この硝子は可なり吾國の硝子との關係に、古い歴史を有するものさせなければならぬ。彼の支那の最初の訪問者たる利瑪竇は明の萬曆二十九年頃だから吾朝より約六十年許り以後である。この利瑪竇が貢獻した方物中には『自鳴鐘玻璃鏡等』があつたことは、聖朝破邪集に掲載せられてゐるだから夫れより六十年前に遡つたザヴィエルの來朝にも、斯うした貢獻があつたかも知れない。最もこれは私の臆測に過ぎないが……。  
 ザヴィエルの來航に就て、その模様を詳しく書いてゐるのは天文末錄である。それを少し抄出するに  
 原夫天文末有商客從西夷惠多俚夜國浪帆來寄三船於豐後國尋其船路從西海而向三南方一往自三南方向北而來二十日故倭國人呼之爲三南蠻人

見其船中商客棹郎都二百餘人其中見形吸異于象人之人兩箇名曰三附爾志須古婆比惠妻一人名曰我須願妻一稱此二人曰船姪連此翻和尚又有二人伴者名曰路連會是爲由斐渡此翻首座此人日本和州之產本名曰了西從薩州渡浪魔學天主教一而又來于日本其宗旨名曰吉利志社云々

さある。これに因るに大和の人、了西といふ坊さんが水先案内をして、吉利支丹一行を吾國に紹介したことになる。惜い哉、この人の傳記を私は詳しく知らないが、此の天文末録は既に對治耶宗論を書く程あつて、その中には史實的に面白いことを説いてゐる。序に硝子には何の關係もないが、吉利支丹を古人は何う解釋してゐたか、いふ點に就ては、少し興味があるので、抄出してみやう。好學の人は何かの參考に供せられたい。

言吉利志社者寸須歸依釋氏而學旨也求其來由是寸須歸依釋氏而學

三名相自起邪見而作外道者必矣キリストが釋迦から名相を學んだといふのは臆測にしても、一卓見である。當時の教旨が類似點をもつことは認め得られてゐるから。又、その後には斯處解釋を下してゐる。

是寸須爲人也膽大廉心虛妄巧見難歸釋氏只學其名相不到其窮也女僞竊釋氏法相還作外道邪見或改其名而執其實或同其事而異其理これではキリストも釋迦から經文を窃んだことになり、殊に「其の玄を窮むるに到らず」は如何にも東洋思想らしき書き方である。この後へ所謂キリストが佛教より採用したものを擧げてゐる。それには

改梵天王名泥烏須改諸梵衆名安耻改三天堂名三頗羅夷會改入道名附妻伽倒刺夜改地獄名因邊婁濃改灌頂名婆宇低寸茂改懺悔名涅毘三改三十善戒名二十駄彌免徒の如きものである。未だ此のやうな「改

めて、何名づける」ミ例を擧げて論じてゐるが、要は、これに類したものである。この説が偏重したものであるにしても、當時のキリスト教即ち吉利支丹を佛教に比して對象するところ、可なり頭のあつた人が論じたものであらう。筆者は雪窓宗崔述さあるが、私には其の人の素性が分らない。恐らくは佛教を深く研究した人には相違なからう。御承知の方は是非御教示を願ひたい。

### 合本と殘本

「川柳雜誌」の「殘本」が少々ありますから不揃ひのため合本が出来ず、お困まりの方に左の値段で御頒ち致します。

- 第一、二、三卷、一部 各拾錢
- 第四卷 一部 各拾五錢
- 極く少数しか殘本がありませんから至急本社に御申込下さい、又クロス金文字入り「合本」左の値段で御頒ち致します
- 第一、二卷 金五圓
- 第三、四卷 金三圓



柳 評  
釋 樽

# 廿四篇まで (九)

麻 生 路 郎

(六) 二篇の句 (續き)

火ばしにてやほめくく書いて見せ

次の間に女房が控はてゐるのに、又しても昨夜廊へ行つた話をはじめ出さうとするので、それをされては一大事、こは云ひながら、そんな話は止せとも云へず、火箸で頻りに灰を掻きながらしては野暮奴くく書いて見せてゐるこいふのである。穿ちの句。

親類を見知るこ嫁はもめんもの

さうせレベル以下だこ自覺してゐる女でさへ、あの半襟はうつりがよいの、横綱は肥つて見ゆるのこなか、の苦勞が付き纏ふ。まして縁づいて間のない花嫁の身になれば嘘にも美しいお嫁さんだこ云はれて見たい。やはらかいものであれば、いかり肩でも幾らかしなやかに見ゆるこいふの努力はなかく捨てが

たいものである。

さて遠い親類まで一ト通り顔を見知つてしまふこ、さうくおかひこぐるみでは世間の口もうるさいので、木綿着に纏がけの甲斐がひしさをさせるのである。穿ちの句  
子を持つた大工一足おそく来る

大工こいふものは高い處へあがる職業なので、何時落ちて怪我をしないこも限らないから一ト入子ほんのうにもなるのである。

今までは何かにつれて一番がけにやつて来たが、子持ちになつてからは、仕事の時間でも、仲間の寄合ひでも子の愛にひかされて、一ト足おくれてやつて来るやうになつたこいふのである。

氣違ひになつたでよめの理が聞ぬ

嫁が来てから暗い家になつた。嫁いぢりがひきすぎるからだ

さか、嫁が大體よくないからださか噂はさま／＼であつた。さうした噂が耳に這入れば這入るで嫁さ姑の溝はますます大きくなるばかりであつた。嫁は、それを氣に病んで、さう／＼氣が違つてしまつた。が、噂は、姑を憎んで嫁に同情した。今更嫁の理が聞けたからきて何んにならう。一篇の哀詩である。

醫者衆はじせいのほめて立てたり  
醫者衆はまだ立たぬ間に、早や臨終になつた。眼を泣き腫らした妻女を見ては、醫者達もそつげなく座を立ちかねて、辭世の句をほめて、それを機會に立つたさか思はれる。

三味線屋語り出すかと思はれる  
三味線屋が張替へた太棹の調子を合はしてゐるさか。今にも語り出すかと思ふやうないゝ音色を出しては、びたり止めてしまふ。三味線屋の態度を寫眞させる上乘の寫生句だ。おなじく二篇の句に

ひいて見て又首ひねる三味線屋の句がある。

掃く先をやう／＼と立つ物思ひ

「逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」  
さか歌がある「しのぶれぎ色に出にけりわが戀は物や思ふも人のさふまで」さか歌もある「さう鬱ぎこんではかしたるてもしやうがないぢやないか、さあ／＼一度立つて椽にでも出て御覽」さか云ひながら掃きにかゝる。すぐ手前まで掃いて來られて

止むなく立ちあがつてゆく。庭には靜心なく花が散つてゐる。追はぎにあふたもしるす旅日記

廣重の繪にあるやうな松かによき／＼立つてゐる。早立ちの旅商人は、噂の追剥ぎにびくつきながらも、先を急いだ。松並木を七分通り來たさかところで、浪人らしい雲突くやうな大男が行く途をふさいだ。ぎら／＼光るものを突きつけた「身ぐるみ脱いで行けッ」を顎をしやくつた。

子の祝ひ夫婦けんくわの一つ也

長男のこころではあるし、なるべく立派に祝つてやりたいさかふのが女房、物入頼きの事でもあるからなるべく質素に祝つて置けさかふのが亭主。これも夫婦けんくわの一つであるさかいふのである。

なく時の櫛は炬燵を越して落ち

外は雪がちら／＼してゐる。派出な友仙模様の炬燵蒲團が懸つてゐる。二人は云ひ争つた。女は今さらのやうに悲しさがこみあけて來た。炬燵にうつふして泣き入つた拍子にさしてゐた櫛がすわりと抜けてこたつの向ふ側に落ちた。艶な句である。

算盤を二度手に取るさか直が出來る

「それでは特に勉強をしてコレ／＼にいたして置ませう」  
さか算盤へバチリミ入れて見せるが、客の方では條にのぞかうも  
もしない。「あつさりミ負けておきたまへ」「さういたしまし  
てそれでは全く損が行きます」さか押問答數回、客の方では

「さうしても負からねば止す分の事さ」ミなか／＼強く出る。「困りましたな」頭をかき／＼もう一度算盤をこりあけるがこんきは上の空でバチ／＼と弾き「エイ、よろしうございます特にお負け申ませう。二十二圓ではとてもお買ひ物です。すぐお届けいたします」さいふのこころ。

里のない女房は井戸でこわがらせ

寛家のない女房は、一寸里へ行つてまゐります云つて亭主を嚇かす譯にもいかない。此まゝで極道の亭主につれ添ふては行末が案じられる。寂しさ、やる瀬なさのやり場がない。そこで、なんぞさいふにすぐに死んでしまひます／＼云つては裸足で騙けおとりて井戸へ飛び込まうとするのである。悲慘な滑稽である。

いきものやうにさらへる心太

夏の強烈な日ざしが疊を這ふてゐる。太心は海月のやうに水の中に、フワ／＼と浮かんでゐる。美しい手がそれを攔まうとした。心太はつるりさぬけて向ふの方へ行つてしまふ。そのさまがいかにいきものやうである云つたのである。川柳的な観方である。

母の名は親仁の腕にしなびて居

長い間の出来事を想像せしめる句である。現今ではだん／＼と墨が減つてしまつたけれども、江戸時代にはかなり盛んであつた。見た、三社祭の時、町内の若者二十何人が共同して春を

並べ一疋のうわばみをほつたさうである。それミこれミは違ふが、何某命ミ女の名を彫込んだ入墨で、老夫婦の若い日が偲ばれるではないか。人間はつひに老ひ込んでしまふものである。こゝを現實に見せつけられるやうで寂しさがせまつてくる句だ。

つねていの嘘では行かぬ大三十日

ないものは拂はれぬミも云へぬ大晦日。何んミかして拂はねばならぬ大晦日。昔は弓張提灯をさけて初雞の聲を聞くまでも掛舌に廻つたものである。ありきたりの嘘では到底駄目。

乳母の名は請狀の時よむばかり

ばあや／＼で乳母の名は呼ばれない。そこを捉へたのであるが大した句ではない。

やわ／＼と引立て聞くぶだうの直

果物屋の店先に、白く粉がふいた本葡萄の房が累累盛りあけられてゐる。買ひたいミは思ふが、ごちや／＼してゐるのでこんな房だかよく分らない。手荒なこゝをしては粒がちぎれて落ちるかもしれないので、氣味のわるさうな手つきをして、やんわり房を持ちあけて値を聞いたのである。上品な寫生句である。

能いむすめ母もほれての數に入り

い／＼むすめには、はれが多い。その多いほれての中の一人に母親も這入つてゐるミいつたのである。穿ちの句。

猿轡 和尚をはじめたてまつり

寺に早がねが鳴つた。それつごばかり村人が駆けつけて見ると、和尚をはじめ、納所、小僧にいたるまで縛りあげられ、猿轡をはめられてゐる。寺に小金を貯めてゐるのを知つて盗人が這入つたのである。和尚をはじめ奉りて、その半景が躍如こしてゐる。

鳥の毛をすてるに風を見すまして

鳥の毛をむしつたのはいゝが、さてそれを捨てるのに困るものだ。裏の方へもつて行つて、風を見すまして捨てないで、少しでもこちら向きに風が吹いてゐるやうものなら、みんな舞ひ戻つてしまふからである。この句は軽い穿ちの句であつたが、私はむしろ感じの句として探りたい。

立ひざで文を書くのもすがた也

遊女が立ひざで文をかくてゐる姿も男を迷はせるのに充分である、こゝでも無心状を書いてゐることは見ぬない。

なぐさみに女房のいけん聞いて居る

「幾らお呑みになつてもいゝけれどお身體に障るゝいけないから」さか「遊びにゐらつしやるのを決して止めはいたしませんや、あまり遅くならないやうにして下さらないで妾が舅さんや姑さんに申譯がありませんから」さか云ふのが女房のきまり文句。亭主は寝轉んだまゝ「いかに」さか「その通り〜」なぐさ茶化しながらきいてゐるのである光景躍如。

## 法 廷

ゲ  
ー  
テ

誰の子だかは申しませぬ

わたしのおなかに出来たのが  
みだらな奴とおつしやつても

いゝ人の名は申しませぬ

それはかわいゝ善人です  
金のくさを首にかけ

薬の帽子を戴いた

世間の非難や嘲りは

わたし一人で引受けます  
たがひにゆるした二人のこゝろ  
神様だつてごぞんじです

法官様と牧師様

どうぞ放免して下さい

この子は全くわたしのです  
皆様に關係はございません

# 募集

## 芝居

# 句

## 森東魚選

# 戶籍調餘談

## 川柳家の年齢

## 石賀馬行

不景氣はうたい何處も中座の灯  
 芝居もうすんで寂しい灯に更  
 傘も来て小僧一幕見て歸り  
 田舎者場次第の芝居を見  
 組見の一人黄いろい聲をほめ  
 劍劇の歸りに刀買わされる  
 村芝居白燭光が光つて居  
 村芝居無茶苦茶にとる芝居行  
 かみゆいの機嫌までとる芝居行  
 雨宿り芝居氣もなく晴れ上り  
 村芝居夕べのおかる田圃をかき  
 若旦那芝居の噂き聞きあぐみ  
 海岸の月は熱海の場に見立て  
 肩入の同なじ芝居三度見る  
 秋祭り御難の一座浮ぶなり  
 柏子木の忽ち幕へ皆んなの眼  
 村芝居樂屋の方も手をたゞき  
 泣かされた上で役者の名を覚え  
 愁嘆場ほんごのうそに泣かさ  
 老夫婦浮世離れて芝居を見  
 お芝居のお供三女中結ひに来る  
 婿曳の芝居餘りに明る過ぎ

水聲 冬木立 伴内 吉朗 突支坊 如 綠之助 松雪堂 鎌月 耕白 陽喜亭 鹿村 新水 嵐爽 二水 村奉行 金鐵子 野人 秀甫 無心

芝居見に金のかゝつた詣り来る  
 芝居さえなけりやと思ふ亭主  
 女中同なじ様に芝居すき  
 花道へかゝれば二階首が伸び  
 鐘一つ鳴つて舞臺の闇の色  
 お針子の芝居話へ針を止め  
 大悲劇青い電氣へ琵琶を弾き  
 花道をかけて女の目立つなり  
 本舞臺傘を目掛けて雪が降り  
 村芝居はてゝそこら虫の聲  
 芝居好き活動なき安く云ひ  
 芝居氣が當つて思ふつほへ落ち  
 芝居とはあゝ知らなんだ知を  
 日のべする芝居に母も見行氣  
 芝居から歸つた孫に切られて見  
 劍劇となつて夥た子をゆりおこ  
 ゆるされた出孫の二人うらやま  
 お迎への傘に芝居は雨を知り  
 組見の花かんざしへ灯が點り  
 今日もまた不入樂屋に寒く寄り  
 腰元は渡り臺詞のお辭儀をし  
 ビカ一で奮闘劇の旗を上げ

雷相 九柳 同 映紫朗 同 眠聲 同 柚蘭坊 同 琴人 同 曙草 同 玉政 同 蒼梧樓 同 柳秀 同 源坊 同 萬よし

會つて見るさ、案外若い人であつたり  
 或ひは又、想像以上の年輩者で、こちら  
 が返つて、てる、場合なきよくある事だ  
 是は句會の席上なきで經驗する事が多い  
 敢えて僕一人だけではあるまい。  
 然し、それも束の間で、數分の後には  
 忽ち、川柳愛さでも云つたやうな感情が  
 渾然と湧き出て、そつした年齢の差など  
 一切、無に返らしてしまふのが常であるが  
 ならう事なら、會ふまでに豫め年齢位  
 知つておきたいのが人情だらう。  
 かるが故に、云ふわけではないが、  
 年改まつた川柳家の年齢表を御目に掛け  
 やう。よろしく炬燵の上でゆつくり算盤  
 でも弾いて研究していただきたい。  
 所でロシヤへ行つた後藤新平氏が、あ  
 の元氣で七十二才ださ、いさゝか羨し  
 い。川柳家も宜敷、あの程度の元氣位は  
 めい、持合せたいものと思ふ。新年に  
 際して切にそう感じる。

## 川柳家の年齢(昭和三年度)

かぶり付ふき播磨屋の涙を見 同  
 初芝居らしゆう幟に風があり 同  
 猿芝居一寸くさかのい所をき 同  
 悪黨の運の傾く幕さなり 千鳥  
 いぢらしい子役さうちの子を較べ 同  
 組見に向棧敷と眼が出合ひ 翠峯  
 村芝居有志道具を借り歩き 同  
 猿芝居犬機嫌よく猿をのせ 光哉  
 一刀のもとに切られて役はすみ 同  
 村芝居巡查土瓶の酒を飲み 寸馬  
 剃刀の入智辨芝居やつて退け 同  
 小道具に兜は軽く渡される 鳴穂堂  
 殺されたまゝ舞臺は冷めて来る 同  
 開幕のベル食堂は子をせかし 同  
 見合さは知らぬ喜劇に笑ひすぎ 笑人  
 かぶりつき役者の鼻の穴を見る 同  
 誰も居ぬ舞臺に太夫の聲が冴ぬ 同  
 木に竹をついで洋劇解らせず 町二  
 棧敷をこぼるゝばかり雛妓るる 同  
 帝劇の廊下ぎつちも連れてゐる 同  
 春芝居女房風雅を口惜しがり 同  
 おろかさばこんな芝居に泣けてゐる 同

(佳句)

芝居氣も 酒落ッ氣も金を蓄め 笑人  
 衛生劇巡查なかよく動き 齋磨

出るが出るまで子役に云ひ含め 草明  
 樂屋から褒めて築地は損ばかり 萬よし  
 母親に劍劇は泣き足らぬなり 伴内  
 幕合に見れば隣りも鼻をかみ 重陽子  
 出前持樂屋で拍手聞いて出る 鳴穂堂  
 役者の名驛夫役者の荷を覺ぬ 同  
 芝居から泣けてくさ母戻り 町二  
 舞臺からさうに氣づいてゐる腫 同  
 善人に芝居を泣いてなり濟ませ 杏三  
 書割の月に似たのを見て戻り 同  
 劍劇のみんな殺して幕になり 鮎美  
 その科白もう悪人さわかるなり 同  
 (人)詰された芝居母親例に引き 京郎  
 (地)髮結は芝居をほめて結い上げ 聞路  
 (天)花道に近く女將は冷笑され 東魚  
 春興追加十句 森

- (六〇)久良岐
- (五九)劍花坊
- (五六)卯木
- (五三)山戀坊
- (五一)百樹、銀波樓、楓林、
- (五〇)花蝶
- (四九)春雨
- (四八)濁水
- (四七)五葉、突支坊、
- (四六)三休、〇丸
- (四五)虹衣、花菱、萬よし
- (四四)荷十、寛江
- (四三)力好、兎絲子、利劍坊
- (四二)日車、省一、文錢
- (四一)路郎、義矢滿、普天
- (四〇)半文錢、雅樂王、映絲、東魚
- (森)愚劣、半覺、光路
- (三九)紋太、溪花坊、美の作、瀧明、  
悠々、京之助、丹三郎、輝翠、  
大夢子、左馬
- (三八)五花村、蚊象、餘念坊、小阿彌  
助六、
- (三七)水府、久流美、一二(森田)啞人  
紫明、乾坤、山月、二柳子
- (三六)花童子、夢路、五健、朝陽、霞  
乃
- (三五)松郎、彩霞、美江
- (三四)五呂八、志貴南、羊白、一休、

# 辻占

## 小西兎絲子選

あれ程の父辻占を買つて来る 冬木立  
 案じてる母辻占にまた迷ひ 伴内  
 牛酔ひは辻占を讀む閉があり 映紫朗  
 何氣なく讀む辻占の氣にかゝり 鯉友  
 辻占に迷はされてるのも女 香行  
 辻占を絶えなく聞く寒い晩 吉郎  
 上吉さ出た辻占へ紅の跡 かほる  
 辻占の書いた通に拂らず 太路  
 末吉の辻占にまだ恵まれず 虚白  
 心中の袖に辻占濡れてゐる 孤舟  
 ちと儲けが辻占を買つてやり 琴人  
 辻占屋もめてる事を知らず賣り 玉仙  
 聲色を一つ覺えて辻占屋 耕白  
 大吉さ出た辻占へ首がより 京郎  
 何氣なく買ふた辻占ヒタミ合ひ 陽喜亭  
 もう一度今の辻占讀みなをし 漫酒樓  
 見直して見ても辻占同じ文字 九柳  
 辻占を讀んでビールの豆を嚙み 嵐爽  
 辻占を女將も一つ開けて見る 寸馬  
 辻占になにそんなこゝそんなと 吐露樓  
 辻占を女まじめに讀んで居る 忠八  
 常になどなるか大吉笑つてる 晃卓  
 色町が更けて辻占一人去に 郊村

横町へ曲つたらしい鳴子板 村奉行  
 辻占屋賣れた銅貨の嵩を知り 千鳥  
 待ち人が来る辻占に裏切られ 水聲  
 辻占が氣にかゝつてウエトレス 貞公子  
 辻占へさて金策がなんこ出る 野人  
 たもとから辻占の出る衣更へ ひさし  
 日を悪い事を辻占知らせて居 幸泉  
 醉眼朦朧さ辻占の首尾 翠峯  
 それにしても辻占氣にかゝる音 冷笑  
 色街へ来て辻占屋むきになり 無心  
 辻占になくさめらるゝ戀でなし 綠葉  
 かじかんだ手へ辻占屋錢を受け 袖蘭坊  
 膝枕辻占賣りを遠く聞き 綠之助  
 辻占へ舞妓の思ひ當る事 同  
 猫板にのべた辻占二度讀まれ 蓮恭  
 媒介は辻占のこゝ交ぜていひ 同  
 氣迷ひふこ辻占へ聲をかけ 眠聲  
 辻占へ悴は家出したまんま 同  
 辻占屋曲り角までついて去に 秀郎  
 辻占を賣る子に添ふた影もあり 同  
 辻占の手へ汚なそう乗せてやり 突支坊  
 辻占のよい事づくめも嬉し 同  
 失職の辻占頼る氣にもなり 戀里

- (一) 鞍馬、古城山、子行
- (二) 藤、不二綱、飯山、夢遊、青葉冠、匂三昧、ひろし、悟郎、秀花坊、史風、革郎
- (三) 右大臣、太柳丸、番翁、白蝶、佳鳴、雅幽、柳路、莢豆、叱咤郎、朱唇子、
- (四) かほる、屏三呂、眠聲、駒人、博久、山雨樓、多聞
- (五) 凡平、白鷗、光太樓、金鉄子
- (六) 夢二郎、眼隠子、長人、清公子、三笑、鮎美
- (七) 幸男、吐露樓、一閑子、靈翠、耕水、一路、柳人、彩秋、文絲案山子、雪洞
- (八) 春三、刀三、町二、三三四、天花、十字路、露斗、双柳、千代二、馬行
- (九) 一文字、琴月、益男
- (一〇) 聞路、草木、冬青、天痴人
- (一一) 霧太、枝呂、一吉、袈裟雄、椿薰
- (一二) 東洋鬼、波郎
- (一三) 穂波、二南、隨帖、しける、ひで一、郊村、
- (一四) 靜雲、一狂
- (一五) 鎌月、手腕坊
- (一六) 仙坊

辻占を頼りにする母であり  
 ゴム靴の音で辻占走るなり  
 偽善にもあらず辻占五枚買ひ  
 氣迷は辻占を買ふ氣にもなり  
 千鳥足同じ辻占二枚買ひ  
 辻占の賣上高へ夜の冷に  
 生活の裏辻占の聲は更け  
 馴れてゐる辻占鳴子に節があり  
 待ち人に一枚買つて淋しがり  
 辻占のやつぱり時節待てとあり  
 上かんのきけん辻占買つてやり  
 呑みながら待てば辻占賣の聲  
 蒼梧樓

### 窓

大入りは窓を四五人首で埋め  
 煩悶の窓とは知らぬ小鳥なり  
 小窓から豆腐屋を呼ぶ二階借  
 窓越しに上りたまへ妻の留守  
 窓箔子昨日の雨の跡があり  
 ウインドへ店ありたけの春の色  
 夜汽車フト窓へさやく雪を知  
 カーテンを引いてベランダ月  
 干物を窓一パイの二階借  
 病院の窓へボブラが高く伸び  
 失戀の悩みが今日も窓へ立ち  
 柳陽選

切符さがせば辻占がしほんで出  
 辻占へうなづいてゐる懐手  
 辻占ミ別な思案に暮れかゝり  
 辻占に聞けばはつきり二年生  
 辻占へ劍もほろゝに五錢やり  
 否定していても辻占氣にかゝり  
 辻占のこゝらで一つ聲をあけ  
 女難あるだけ辻占合ふてゐる  
 辻占へ和尚無言のまゝ笑ひ  
 待ち人來る辻占たゝまれる  
 じれつたさ辻占を買ふ氣にも  
 同 金鐵子  
 同 萬よし  
 同 柳秀  
 同 雷相  
 同 源坊

### 中野柳陽 橋本二柳子 共選

大驛へ着くそろつて窓をあけ  
 病院の窓へ満月見舞うよう  
 明月の夜業の窓は開いたまゝ  
 控室煙を逃がす窓を開け  
 見送りの窓へ小さな顔がより  
 飛行機に生徒の視線窓へより  
 十五夜の月にひかれて窓をあけ  
 丸窓の琵琶ハツキリさ何か引き  
 線香の煙が窓の外へ伸び  
 カーテンを閉めおしい好い月夜  
 二階借隣のラジオ窓で聞き  
 窓の灯に試験くゝがつゞく也  
 吐露樓

(一八)百々郎  
 (二七)清賢

## 經濟時事吟

### 三好革郎

川柳時事吟を書くことが、私の大阪經濟新聞に於ける仕事の一つです、毎日二十餘種の新聞に目を通し、五句を作らなければならぬのです、問題を掴むのに先づ一骨折れるのです、その問題をデッサン紙の上に置いてみんなが雜談やら猥談をして居る中で、無念夢想の境に這入つて川柳でなければ表現できない味(藝術味)を出したいと焦るのです。それが時事問題さいふ、環を口にはめられて作句せなければならぬのですから、問題によるさじきだしたいくらいになります。それに新聞の性質が經濟問題を主とした新聞であるだけに、取材の範圍が非常に制限されるのです、その爲めに同一の問題たとへば休銀問題などは、事情の變化につれて何度も取扱はねばならぬのです、こんな

ぎの窓も修學旅行顔を出し 同  
 氣兼しつ二階の窓へ呼びかける 寸馬  
 丸窓へくずれて座る 百個日 翠峯  
 トンネルをぬけると窓を開き音 九柳  
 大雨の止んだと思ふ窓を開け 同  
 病院の笑ふ窓やら呻く窓 壽磨  
 汗臭いケイコの窓へ人がより 同  
 洋館の窓に淋しくチウリツブ 玉政  
 ホネムーン窓へ二ツの顔が寄り 同  
 汽車の窓母の注意がクド過ぎる 同  
 叱る子を窓から連れが呼ぶ居る 同  
 同病の退院窓から送つてる 同  
 三尺の窓に生駒の山けむり 同  
 見送りさ挥手して居る汽車の窓 吉路  
 窓の雲故郷の空へ飛んで居る 重陽子  
 汽車の窓萬歳かあり泣くがあり 同  
 二階借から窓へ禮を言ひ 秀郎  
 八方の窓へ手が出る 五分間 突支坊  
 出札の窓から女覗かれる 柳秀  
 汽車の窓祭の鐘を入れて行き 柳秀  
 同窓の變つた風に道であい 漫酒樓  
 圓窓に大きく動く髭の影 箱八  
 受付の窓が閉つて晝になり 蒼梧樓  
 ビルデング窓々々積み重ね 村奉行  
 窓硝子こはれたまの貸家札 光哉  
 キリギリ窓に動かす更り行き 萬よし

町廻り窓へ皆んなの首がより 草明

五 客

窓を洩る朝の陽差しへ浮く埃 雪箱 相  
 釣忍クツキリミ浮く朝の窓 八  
 ビルデング下の窓から日が暮る 伴内  
 窓硝子光つて誰か首を出し 柳蘭坊  
 ぎの窓も笑顔で埋まる貸切車 萬よし  
 (人)窓越しの雪ヒタ〜さ迫るよ かのほ  
 評 常夏の國に住んで此の句を吐くに難  
 いでしようヒタ〜さ迫るよう、よく實  
 感を表はして居る、  
 (地)留置場四角に朝が訪れる 町二  
 評 四角に朝と云つて題窓に力を集中した  
 所七白餘句中他の追従を許さず、  
 光なくして居られない人間ましてやそ  
 こにみ曉待つ者ハツキリさ四角な朝を  
 迎へた事ならむ、調共によろし  
 (天)開け放つ窓一バイに朝の風 光哉  
 評 自然と人生を一個の窓に結びつけて  
 一分のスキをあたへず、朝を迎へて更生  
 する力血潮の奔流を見る 襟なり自信を  
 持して天位に置くに迷はず、  
 (軸イ)窓近く尼僧俗世の月に座し柳 陽  
 (ロ)河添ひの窓折々の額に人間味、 同  
 イは未だかれ切らぬ尼僧の人間味、  
 ロはスケッチ、共に拙吟を恥づ

選後

窓に對して投句者六十八名七百餘句中より  
選句五十八句、知名の柳人數多見受けられた

時には一番表現に苦心をするのです私は  
 藝術が仕事になるときには詩的情操は估  
 れ果て、殘滓だけが表はれるものだ云  
 ふこを痛切に感じさせられて居ます  
 (私の場合だけには)川柳は最も大衆に呼  
 びかける藝術表現であると同時に、最も  
 個性を濃厚に端的に表はす詩であること  
 信じて居ます、それだけ私は自分の思想と  
 生活を大衆化せねばならぬと思ひます。  
 そしてこれは自分のものだ云ひ得るも  
 のを持たねばならぬと思つて居ます然る  
 に私は長い間の因習から思想も生活も貴  
 族趣味の色に濃く染まり過ぎて居ます一  
 度染つた色が容易に抜けないやうに私の  
 思想も生活も容易に脱色することが出来  
 ないので、又自分を顧るまきこれが私  
 のものだといふものをも持つて居な  
 いのです。茲に私は又違つた意味の悩み  
 を持ちます。  
 川柳時事吟を作るやうになつて約半歳此  
 の悩みが薄らぐどころか益々加はつてく  
 るのをどうすることも出来ないのです。  
 (二、二、六)

割合に感吟の少なかつたを遺憾に思ひます  
希望として左記の二項

- (イ)句稿紙統一(出来得る限り)
  - (ロ)句數制限(現在より少なく)
- (一)句稿の散逸を防ぐと共に整理上便宜の爲

(二)は作句者自選の上の投句となり延いて句其のもの、質をなして高上ならしむる所以句數は五句以内位にては如何。尙玉稿中修字を訂正した上採句のもの三四あり謝辭越。

◇ 二柳子選

気がねして二階の窓へ呼びかゝる 寸馬  
 煩悶の窓へ小鳥が鳴きに來る 電相  
 窓越しに向ひの朝の夫婦を見 かほる  
 明け放つ窓一ぱいの朝の風 光哉  
 宴會の一人は窓を開けに立ち 鮎美  
 十五夜の月の光をほめに立ち 秀甫  
 窓しめてからしんみり語り出し 忠八  
 見送りの窓へ小さな顔が寄り 金鐵子  
 控室煙心がすに窓を開け 鳴穂堂  
 大驛へ着くこみんなが窓をあけ 千鳥  
 失戀の惱しよんほり窓に立ち 水聲  
 硝子窓蠅抜けられると考へる 郊村

エプロンの白さ窓からのぞける 晃卓  
 父の死後あれから窓しめたぎり 眠聲  
 窓を窓話しておれば子が覗き 蒼梧樓  
 文鳥は靜かな窓に吊つてあり 箱八  
 銀行の窓から見ても 秋の空 萬よし  
 息づまやうにビルデング窓をし 幸泉  
 植こみの向ふに一つ窓が見え 笑人  
 賑やかな小僧窓から首を出し 玉仙  
 何を言ふさなく窓に寄るひこり 曙草  
 窓越におふくろを呼ぶ朝歸り ひさし  
 汽車の窓しめつほいのミ萬歳さ 琴人  
 急停車窓全部が顔になり 秀郎  
 不意に窓あけてびつくりささ人 映紫朋  
 叱る子を窓から連れが呼ぶ來る 高峰  
 汽車の窓母の注意は行届き 源坊  
 叱るだけ叱つて窓を開けに立ち 九柳  
 窓さ云ふ窓を宿直締めて寝る 柚蘭坊  
 ビルデング下の窓から日が暮る 伴内  
 憂鬱の窓に塵が目立つなり 翠峯  
 窓越しに火の手は取るきに見ゆ 同  
 女教員軽く疲れて窓に倚り 柳秀  
 窓際に居れば汽車辨頼まれる 同  
 カーテンを引こヴェランダ月夜 同  
 先生のテニスに窓で聲をあけ 同  
 先生 同 二

正誤

十二月各地柳壇大和路吟行中下  
 段明朝さあるは飛鳥朝の誤、又  
 近作柳壇中夢路さあるは聞路の誤▲同號三  
 七頁中澤濁水氏の句中「満蒙までも」知つて  
 家賃が滞り「食してやる氣で縁談を纏め  
 てる」の二句は萬よし氏の句の誤

投稿家へ

今後は「近作柳壇」の句は二十句以内「募  
 集句」は十句以内致しますから、投句家各  
 位は自から選句の上送られたし

新春川柳會

日時 一月八日午後六時半  
 會場 南區日本橋一交叉點北辻東入  
 日本橋俱樂部  
 電話南三四二四番

兼題「旅」

三句  
 講演 川柳の前途 麻生路郎  
 會費 金五拾錢

紀念撮影、茶菓呈。同好の御友人お  
 誘合はせの上御出席を願います

御知らせ

長谷川一徹氏は醫學博士になられました。  
 ▼三太郎氏は東京磯部甲陽堂から滑稽句集  
 を出版される事になりました▼▼▼▼本社は今回  
 讀者各位の御希望に依り維持社友制度を設  
 けました維持社友となつて下さる方は本社  
 へ御照會を願います。

# 古句質疑

## 蛭子省二

### 質疑小規

(一)質疑は古句に限ること。なるべく古句の出所を書添ひて置くこと。(二)質疑ははがきで一人一回三問までのこと。(三)質疑のはがきには住所姓名を明記すること、但し誌上の匿名は差支なし(四)一度答へた句、末番の句等については答へない。(五)質疑應答は必ずしも先着順ではない、研究の餘地ある句は次第廻しとする。質疑輯録の場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社古句質疑係宛のこと。

### 耳たぶの小さい奴か塚になり

質疑者 琴

(十七) 人(三重)

京の耳塚「耳朶の大きい人は運がよい」の反對に、小さいのが皆殺されたこと云ふ句、神相至篇に、耳厚而堅、聳而長、皆壽相也……耳如如紙、骨窮無倚こある、耳塚に就て橋意自詰の一に「當時京の大佛殿の前なる耳塚こいふもの、仔細よく人しりたれども、むかしもその類有しこころを、はず、古事談第五に、六條門北西洞院西有堂、號こノウ堂、件堂者 伊

豫入道頼義奥州、俘囚討滅之後所建立也。佛は等身阿彌陀也、頼義造立此佛、恭敬禮拜して、往生極樂必引導給へし申りれば、うなづかせ給けり、十二年之間戰場死亡之者片耳を切あつめて、ほして皮古二合に入れて持て上りたりけるを、件の堂の土壇下に埋云々、仍耳納堂云也、ミノウ堂云云辭事也こあり、耳塚こいふ仔細はかはれども、にかよひたる事也。ミノウは則耳納なるべし、今の五條橋通西洞院北西にあたれどもその古跡はなし

歴史吟の價值に關しては、私も常に説き路郎氏も「金子氏の川柳點」の際陳べられた通り、モウ古人の作に任して可なり好むで今人が翻案式に作る要はないと思ふ。時事吟が後から眞似られないように歴史方面にも考慮の理由がつく、本句の如きも決して佳吟ではない。

### おんばくでもないけないな能因持ち

質疑者 琴

人(三重)

能因法師は仲々洒落氣の豊かな人で、川柳には面白い材料を提供して呉れてゐる。例の白河の關の歌、天の河の雨乞の歌などの外に、藤原節信と珍品一種の高慢較べ、能因は長柄の橋の鮑屑、節信は井手の蛙のひからびたのを、懐中から取出しお互に悦に入つた。

お互に頭陀から蛙かんなくづ節信の胸に蛙の歌袋  
かなくしくも木つばだの干物だ  
かんな屑蛙と同氣相求め  
先牛も東京で一人一種展が催され、蛙の蒐集家はあつたが、鮑屑はなかつた。今

日では肥槽百荷主我で、數を誇るようになつた。おんばくと蛙の關係は「撈海一得」に「今兒戲に蝦蟇を捉て鬪殺し、地に小坑をなし、車前草を纏ぎ、死蝦蟇を安頓し、上へ又車前草を被ひ、畢て小兒圍繞境列して祝す曰、かいるごりのおしにやつた、おんばくごの、おんごむらいた齋聲嗶嗶して是を哭す、須臾にして死蝦蟇蹶然跳躍す、按毛詩不莠疏曰、韓詩云不莠曰車前草、郭璞曰、今ノ車前草大葉長穗、江東呼蝦蟇衣、陸璣草木疏云、車前草、一名蝦蟇衣、順和名抄和名オホハコ是也、カマ衣ニハカマを蓋ふの義、吾邦之童子不由之教、而爲之戲、胸古合書之義學者因而爲格物之一助也、凡彼我相同じきこゝ、彼を學びて爲こ思ふは誤也」云々、十六篇

くはれない干物歌人もつてゐる

「蚌蛤日記中卷」に、山ごもりの後は、あまがへるこいふ名をつけられたりければかくものしけり、こなたさまならでは方もなきなけかしくて、おぼばこの神のた

すけやなかりけん、ちぎりしこをとおもひかへるは、こあるを、解環抄中の十二卷に、大原の神の誤りさせしはひがここなり、萩原宗固が首書に、おぼばこは車前草か和名於保波古、今も童の蛙を殺して其上に此草の葉おほひておひば、蛙のいきかへる戲事をするにや、其事の神なるによりし、おぼばこの神もいへる歟おもひかへるに、蛙をそへたる成べし、こいへるがよろし」云々、擁書漫筆には、詳しに載せてある、井手の里は山吹の名所であるから、

山吹や井手を流るる鮑屑 蕪村

がある、古川柳には

山吹を見ながら蛙とらまへる  
山吹をわけわけ蛙一つこり

三角はめでたい薬袋なり

質疑者 浩 次(茨木縣)

屠蘇袋の事

乳へ子をぶらさけて縫ふ屠蘇袋  
ミを袋は今でも三角であるが、利漢・才圖會にも三角の紅絹の囊を以て之れを盛

り、除夜井底、懸け元旦取出し、酒中に置いて煎ずる事數沸、なきとあるけれども野乃舍隨筆に、元日の屠蘇の袋を今紅の絹を以て、三角に縫ふは僻事なり、茜の絹して四角に縫ひ、大白の糸を以てむすが故實なりとぞ、こある。醫者殿のお歳暮はこそであつたから

歳暮には酒で用ひるのをくれる

一人ミそをのめば一家病なく、一家これをのめば一里病なし云はれる。でがらは井戸へ捨てたもので

さんぶりミ井戸に點うつミを袋

元より藥の酒なれば井戸へ投げ

そは此の水を飲めば一世無病なりとぞ。ミを東に向つて幼き者からのみ始めるのは、少き者は歳を得るから先にし、長じたる者は歳を失ふから後にする。

「古へ屠蘇の屠死尸の尸を忌て一點を加へて戸に作る、是本朝之故實也」なきあ



# 龍 雜草

安川久流美

來年(昭和三年)は龍の歳であるから  
世間並に、龍のこゝを例によつてペン  
走るまま書くことにする、先づ第一番に  
俺の愚妻は辰の歳であるこゝを祝福せね  
ばならぬ。その愚妻が「川柳雜詠」の新  
年號が、全國津々浦々へくまなく届いた  
頃に、人間の子を一人生むのである、現  
在私の豫想は一月三日といふ、私の母の  
誕生日に豫言してゐる。

龍の歳は成功が遅いさかい世間並の  
言葉をよくきく。女には成功なんて、さ  
うでも構はないやうなもの、男はさう

してもこの迷信を氣がかりにするやうだ  
戸籍謄本を見るに、俺の生れは明治二  
十五年一月一日生となつてゐるから、明  
けて三十七歳の龍の歳になる譯だが、實  
際は龍の歳ではない。卯歳生れの明けて  
三十八歳にならるのである、易者に手相で  
も見て貰ふ時は、卯歳だといふが、一つ  
でも若い歳の方がよく、大抵は辰の九紫  
だといふ。

「いらい老けて見えますナ」

この言葉もうれしい。

「オヤ若く見ゆるワ」

この言葉もうれしい。

◇  
舊作にも新作にも龍の句を作つた記憶か  
ない。最近友人が龍の畫をかけた短冊  
に賞を迫られたので

空想を糸がくはみんな雲の下

さいふ句をかけた。われらは久米の仙人  
のやうに雲の上の人になられない凡人だ

◇

俳句雜詠「石楠」誌上に句のうまい北陸  
の俳人小松砂丘君は、近頃俳句より俳畫  
が巧くなつた。「龍」の畫を注文したら  
眞正面白い龍をかくてくれた、しか  
し眞正面を向いた龍にはさうさうなく雅味  
がない。横を向いたのがよいやうである  
龍は寫真に撮るものでなく、畫がかく  
ものである、砂丘君の獨創的の俳畫では  
なからうが、事實上最近同君の畫がよく  
なつたのは、素破らしいものだ。同君の  
畫に提灯をもつて筆を擱く。  
(十二月二日記)

## 人形への思索

大島 濤 明

わたしは博多人形の産地筑前の産れで  
ある、その故か人形に多大の親しみを持  
つてゐる、それで友人達も旅行の序さか  
内地歸りの土産なぎにはよく人形を持つ  
て來て呉れる。

先年佐々木三福君がハルピンに旅行し  
たさき人形の土産を呉れた、大きな松茸

の傘の下に赤髭の老爺が、一升徳利を前に轉がして居眠りしてゐる頗る川柳的な人形である、自分の身體より太い松茸の幹によりかゝつて天國の夢に耽つてゐる有様は、恰も白系露人の現狀を物語つてゐるかのやう、滑稽でもあり悲惨でもあらう。

私はこの人形を見る度いつも思ひ出すそれは大正十二年の二月だつた、關東騷の用務を帯びて南滿州各地の地方施設視察に行つた時のことである、その頃丁度赤露を逐はれた白系露人がハルビン、チハル、西比利亞地方から生命からんく遁れて來て長春奉天その他日本勢力の圈内に、幾百人もなく流浪してゐた、ほんの手廻りの荷物を持つて妻老父母相携へて故國を遁れ、行くべき目的地さへもなく、食ふべきパンもなく只放浪の一群に加はつてゐた、關東廳でも見殺しにする譯にもゆかず奉天では苦力收容所を空けたら、車庫内の空列車に、長春では赤

十字社の醫療車數臺を引出して來て彼等を收容したりして糧食を與へてゐた。私は奉天苦力收容所内の收容露人を視察したが爐のヒだけでは狭いので天井との間にも棚を吊つてそこにも寝せる、各々柳行李だの木箱だのぼんの手廻り衣類小道具を入れてゐるがそれ等が境界さされて幾家族もの露人がするこももなく、只一片のパンの支給に果敢ない生命を續けてゐた、彼等のうちには帝政時代には堂々たる陸軍の將官なごもゐて、私等に榮華時代の寫眞なきを出して見せたりした、そして淡い過古を偲んでゐるらしかつた。

頼るべき君主なく倚るべき國家にも容れられず、數多の家族を引具し見も知らぬ他國の空に、只生命への淡い執着のみを續けてゐる彼等も、松茸の下に天下の埒外に夢遊してゐる人形さ、何たかの暗示の様な氣がしてならなかつた。

### 天國に着くと酔餘の夢が醒め

一昨年私が猖狂熱で入院してゐた際、天津の和田默然人君はわざ／＼病床を見舞つて呉れいろ／＼な土産のうちに天津人形があつた、鹽様の平たい桶を袈裟に肩にかけ支那人常食の高梁パンを賣り歩く人形である、その首は胴さ離れる様になつてゐるので右を向けたり、左を向けたりするこが自由で何處か滑稽味が溢れてゐる、金を得るこより何物もない支那國民性を如實に物語つてゐるかの様首が動いたり、手先が動いたりするこよりはその顔、その姿が如何にも悠容迫らず、亡國國民の風手が窺はれる。

### 銅子兒が殖ゑると輕い桶の餅

京城の島田赤鳥君はわざ／＼小包を以て朝鮮の妓生の人形を送つて呉れた、一人は鼓を打ち、一人は舞を舞つてゐる、如何にものんびりした春宵の心地がする人形である。

この春滿鐵沿線の土木建築工事視察に出かけた序に平壤まで行つて見た、平壤

柳友諸上の御歡待を受けつゝ、柳也君の思ひつきで妓生學校を參觀した、偶若い妓生の卵が舞踊を教つてゐる處だつた、朝鮮の妓生は日本の藝者なごゝは全く素質を異にし、富豪、貴族の娘が榮達の方途として之を志願するものだそうなき柳也君は語つた。

### 哀調の唄で妓生舞ひ終り

中野柳陽君は射的が上手である、いつかの納涼園の歸りに十錢を奮闘して撃ち取つた射的人形を呉れた、網笠の酒々ミから少しの暇を盗んだ家中の若侍か、但しは主家を離れた浪々の武士か、角帯に落し差しの風流さである。

### 粹人の俺と無粋の彼との差

キユビールさんが羽織袴で威儀正しい夫婦の博多人形は竹村氏の贈り物である、亭主は女房の方へ、妻は夫の方へ腫を注いで澄まし込んで坐つてゐる滑稽さは博多人士の飄逸そのまゝである、長女の昌

子か之れに赤い縮緬の座布団を作つてやつたので、今では書架の上に多大の歡待を受けて坐つてゐる。

### 兩方の腫がかち合ふと頬の熱

倒せば眠り起せばバツミ早開く青い眼の人形は古川君が子供への土産である、半ズボンに運動褌衣、赤い髪には食逃げ帽子を冠つてゐる男の子の人形で多分亞米利加製であらう、ごこかに憂鬱な不遜な風が見えるのは米國そのものゝ表徴かのやう人形の精巧、衣装萬端の整備は是等人中での一番高價であるこゝを思はせる。

### 半ズボン父へ我儘いふて出来

私はこれ等の人形を書架の上に列べて徒々の折には只じつと見詰めて思ひつゞける、露西亞、支那、朝鮮、亞米利加、それに日本の人形がやたらに列んでゐる様は恰も國際會議でも開いてゐるかのやう。そしてそれ等の人形が期せずして自國の勢力なり國民性なりを如實に物語つ

てゐる、それは特にこういつた人形が集まつたから斯く感ぜらるゝか知らぬが、國々の風俗習慣乃至は人情道徳から織出された國民性がほんの小さな一つの人形にさへ現はれてゐる、こゝこゝは日本おきして、目下思想動搖の過渡期にある我々として大いに考へさせられる、否考へねばならぬこゝを思ふ。

## 川柳の脊後に

河野 春三

句の技巧にはさう拘泥しなくともいゝ、現在の私は思つてゐる。

勿論句はうまい程いゝに決つてゐるが、句のうまさよりは、句の内容の方が遙かに問題になつてよからうと思ふ。

うまくて内容がよければそれに越した事はないが、大抵は技巧に秀でる事のみを眼中に於てゐるらしい。相當の年数が経てば、大抵の川柳家は技巧だけは心得るやうにはなる。しかし内容の方はさう

は行かない。十年も十五年も川柳をやつてゐる人でも内容の上には何等の深さをも示してゐない人……極端に云へば何物をも持つてゐない人すらかなりある。

毎月夥しく發表されるいろ／＼の雜誌の句を見てゐる中に、これは「まいご」思ひ乍ら何等心に觸れぬ句がある。反對に技巧の上ではまづいご思ひ乍ら、何かしら心を打たれる句がある。その新鮮な感覺に、その鋭い人間性の解剖に、その微妙な自然の觀察に、異常なシヨックをうける事がある。

私は句はまづいごも、こうした感銘を與へる句を尊重したいと思ふ。技巧はそれからの問題である。世間でいふ器用な句を私は好かない。小才の利いた句をそんなに高く買はない。まづいごも眞實の人間ハ叫びがビビッドに表現されてゐる句を拿びたい。内に深く何物かを藏してゐる句に出會ひたい。

技巧はさうでもない、こはいはないが、

それは後の問題である。まづ私達の考へなければならぬのは句の内容ではあるまいか。生活的内容ではあるまいか。哲學的基調、思想的背景ではあるまいか。私達は「まいご」句を句として發表してゐればそれでいゝのだろうか。私はそうではないと思ふ。川柳家は常に句を生むべき自己の生活について考へなければならぬと思ふ。

西田天香氏の「懺悔の生活」に「活きた藝術は表現するまでにもある。までにもあるものでなかつたら、その表現された藝術は死んでゐる。

キリストの十字架は生きてゐる。此口より出た金句は大藝術ではあるまいか。釋迦の成道は生きてゐる。此方の行乞は大藝術ではあるまいか。まここに然りである。

藝術作品として立派なもの、それが表現せられた作者の思想として既に立派なものであつたといつてよい。生活それ

自身に光なくして何ぞ句に光あらんやである。

又曰く「私はジョットの繪を見て拜むしかしあの様な繪のかける、ジョットの魂を更に拜みたい。ミレーの繪に頭が下る。しかしその筆者の生涯をきいてはなみだぐむ程なつかしい。此二人の繪が人類に働いてゐるそれよりは、その人格がはたらいてゐる方、重さを置く」。

勿論私はこの説に全然賛成ではない。何故なら、作者の人格は即ち藝術であるから、その藝術に人格の何れを重きに置くかといふ事は無意味な事と思ふからである。人格の我々に働きかけるものは即ちその藝術が我々に働きかけるものであるからだ。だがそれは兎も角、作品のみを機械的に製作してその生活を顧みない作家に對しては、天香氏の言葉は實によき警鐘であると思ふ。

「アンナ、カレニナ」の後には儼然と大トルストイが輝いて居り「ジャン、クリ

「ストフ」の後には肅然ミロマンロオランが光つてゐる。

私は川柳を生活ミ切り離して考へることはござつても出来ない。啄木の短歌は嘗し三行の書き方をしたから貴いのではない。日用語を自在に用ひたから偉いのではない。彼は實に長袖流の和歌を自己の生活の上に花咲かしたところに貴さがある事。

願つて川柳家の生活を見よ。ここはつて置くが、生活は必ずしも表面の外的生活を云ふのではない。それよりもつ必要なのは、内的生活なのだ。精神的な生活なのだ。作者がされだけ自己を批判し、思索してゐるかといふ事なのだ。人生に對し、如何に第一義的な解釋を施してゐるか、自然に對し如何に鋭い觸覺を有してゐるかといふ事なのだ。いひかへれば本質的な事に關して如何に眞剣な考慮を試みてゐるかといふ事なのだ。世間では、眞面目さか、人格さかいふ言葉を

道徳的な正しさにまつてゐる人もあるが私は本質的な考慮に妥協のない人を眞面目さいひ、それを實行し得る人を人格者ださ考へてゐる。

さて私は幾人の川柳家がその背後に生活らしき生活を持つてゐるかを考へる時、愕然たらざるを得ない。何等の人生觀もなく、深き思想もなく、たゞその日暮しの妥協的生活に安んずる人の如何に多き事よ。古來すぐれたる藝術家はみな背後に惱みの十字架を負うてゐる。荊棘の路を歩んでゐる。讀書ミ思索の底から、血みぎろの叫びをあけてゐる。そこには眞剣な生活があり、作者は生活に正面からぶつつかつてゐる。藝術は清閑の所産ではない。餘暇の遊戯ではない。川柳家もつゞ自己をふりかへつて見なければならぬ。

勿論誰の句にだつて、個性はあるだろう。だが心境的深淺は不知して表れる。「ない袖はふられぬ」さいはうか、くだ

らぬ事に興味を感じた句の如何に多い事よ。勿論句の題材は何を捉へても差支ない。だが作家の題材に對する、持ち一つによつてその句は藝術さなるか、單なる通俗ものさなるかが岐れる。

大衆文藝、通俗小説ミ藝術小説との相違ひどころ文壇で盛んになつたが私はその相違が一部論者の如き題材にあるのではないと思ふ。大衆文藝の題材はさされてゐる歴史物にしても芥川龍之介や谷崎潤一郎が書けば立派に藝術小説さなる、即ち相違は題材にあるのではなく、その題材を如何にさりあつかつてあるか、作者の人生觀は如何にその題材に向けられてあるか——それが問題なのだ。話を川柳に戻す。私は人生觀の第一頁すら考へた事のない川柳家の横行を、藝術の名によつて悲しむものである。多作多作ミタツそれせきせいの如く多産であつて、深く自己を掘り下けて行かない作家の多いことを悲しむものである。

有島武郎氏の著書に書いてあつたが、ある有名な能樂の師匠は、その子供の生活が既に現代式である爲めに能を教へず自分限りで終つたといふ。眞劍に能をやるためには、現代の教育をうけず、現代の空氣にふれず、前世紀のまゝの風俗習慣で育てなければ本當のものは生れて來ないのださうである。多少藝人特有の偏狹さがあるではあらうが、私にはいゝ教訓になつてゐる。

江戸時代の川柳そのまゝを作りたい人は江戸時代そのまゝの生活、風俗の中に住んで始めて本當の江戸川柳が出るのではあるまいか。

現代に生れた私達は飽く迄現代の生活を内容としたい。單なる遊びの川柳ではなく、現代の生活を、思想を明白に語る川柳をしたい。

再びいふ。私は川柳のうまくなる事を希はない。そうして川柳の背後にあるものを忘れてはならないとつくづく思ふ。

かくして私は川柳がすべての人の肺腑に觸れ、感激の中を行く日の來る事を待つてゐる。

## ふろふき

岩本素人

昭和三年と年も更つた。いつ迄も音の無い「鳴り皮」でもあるまいと言うので見出しを新しくする事とした。お題目は變つてもお経は同じだ。相かわらず可愛がつて貰いたい。「ふるふき」ははらふきに似通つて味噌を付けると言ふ謎だ。

## 詩を覗く

私はおしやべりである。饒舌り出すことには必ず、やるせない淋しさが襲つて來るのを常とする。白い洗面器の様な空虚な淋しみである。始めは自分の思ひを傳へるつもりで話してゐるのであるが、いつしか反對に言葉の方に操られてゐたのであつた事に氣づく。此自覺から來る淋しさである。

人間の言葉は一見甚だ便利な様ではあ

るが、さて、奥深く潜んでゐる吾々の生活の眞の姿を如實に傳へんさするには、この言葉なるものゝいかに不適當で自由で用をなさないものか痛切に感じられる。言葉を使へば使ふ程、語れば語るだけ、まことの心の姿を覆い隠しつゝあるのである。維摩經に

「一切の實在に對しては言ふ術を知らぬ言葉や形や、感じで現すことが出来るならば、それは絶対の境界ではない」かう答へてから文殊師利は維摩詰に問ふた「我々は斯様に皆説き已へた。貴下は此の絶対の境界について如何様に考へるか」維摩詰は默然として答へず。

文殊師利はやゝ暫くして感歎の聲を發した「さうだ、これこそ眞に絶対の境界だすべての差別のすがた、文字や言葉にいたるまで何物も空だ、無だ」(現代意譯維摩經)

肯定の否定であり否定の肯定である。實に沈黙は雄辯の極致であるまいか。

私の言ふまゝ、この心の姿は此の沈黙に依しのみよく説明し得らるゝ姿である。即ち概念化せざる以前の未だ何物にも穢されざる生活を指すのである。そこにもまだ分類が行はれしむる無形の一條も、萬有相通するの境地である。一つのキ一を打しばもの皆躍動する世界である。歡喜も法悦に満ち充てる安住の地である。此世界には言葉はいらない。以心傳心である。こゝには西洋と東洋の區別もなく國境もない。貧富の別も社會的階級もない。何等の束縛もない。各人の個性を思ふ存分伸ばし得る絶対自由の樂土である。淨土である。

吾々の日常目の前に展開しつゝあるこの現世界は娑婆と言ひ、うつし世、うつし世、浮世、假りの世等、名付けらるゝ表面である。佛者はこれを穢土と稱へ、哲學者は前者を形而上の世界、後者を形而下の世界と言ふさうである。人間はこの二つの世界に跨つて生活を營

んでゐる。魂を形而上の世界に置き、からだは社會人として形而下の世界へ出稼ぎに来てゐるのであつて、社會人としての生活には人との間の交渉は到底避け得ないのである。そこに妥協の必要も生じる。だからこゝでは否應なしに言語を用ひなくてはならないのであるが、この言語なるものが魂の耳に聞く時、多くの場合出駄羅目であり、お座なりであり、嘘である。話す事は即ち偽る事なのでありながら、尙且つ之れを忍ばなければならぬ。二つの世界に跨つて生活するところの人間に於てはこの甚しい矛盾は大きな惱みでなくて何であらう。堪へ難き人としての悲しい運命ではあるまいか。

饞舌の後の寂寥はこの矛盾の間隙を襲ふ悪魔である。この悲しい運命の悶へから遁れたい爲に人類は詩を創造したのである。詩はまことの世界の消息を傳へる唯一のてだて

であつて、魂と魂との遊歩のアンテナである。かくて詩はあらゆる人々の避難所である。だから詩は詩人のみの詩にあらずして、あらゆる人間の詩でなくてはならないのである。否々人間は悉く詩人である。本來皆生れながらに詩を藏してゐるのであるが或る人は自覺し或る人はこれに氣付かないだけの相違である。かゝる人々を導き其の詩心を啓發せしむる事こそ先覺者の義務であり人間としての務めであるのみならず、一個の魂の詩への目醒めは、人類の最も大いなる悦びなのである。川柳二年生の私が耻を忍んで此拙稿を草す。所以もこゝにある。

詩とは沈黙に最も近き言葉を以てつづられたる魂のさゝやきである。沈黙に近い言葉は、言葉少くこの意味ではない。暗示に富んだ言葉である。リズムカクであり。音樂的である。理智的よりも感情的の、固定的よりも流動的な言なり語である。

詩は死語の羅列ではなくて生ける力である。生命の言語化である。呼吸をしてゐる、刺せば血の滴る活ける生命ものである。又沈黙に堪へかねた生命のうめきが詩であるとも言へやう。

詩は單なる事物の寫生や記述ではない。美辭麗句の配列でもなく、語呂合せや駄洒落や理屈では更でない。言葉の綾か面白くからんでゐるからきてそれは決して詩ではない。そんな淺薄な言葉の上の遊戯であつてはならない。かう言つた文章はそれが如何に巧妙に組立てられてあつても、すべてが理智的であるが故に暗示性に乏しい。頭でこね上げた作品であるから之等を鑑賞するに當つても只其字面に表れた所のものを理智を以て解釋すれば足るのである。一つの世にもかゝる低級なるものが世俗の間に歡迎せらる。所謂俗受けをする。しかし世の中には斯う言ふ種類のもを眞の詩だと思認し、自分も得々たるのみならず人にも之れを宣

傳しつゝある連中が甚だ多い。初心者の最も注意をしないでならないのは實にこゝである。危ないかな、此道の先輩諸君、一言へ共矢張り當初の第一歩を誤つてこゝに落ち込み今尙それに心付かずに居る氣の毒な人々なのである。

詩は單なる頭腦の所産ではない。詩は學問ではないから無學者でも詩人に難くはない。文學博士必ずしも詩人でなく、時には幼稚園のまだ舌の廻らぬ兒童が素晴らしい童謡詩を創作する事もある。

尻切れトンボの様であるが本文はこれでお仕舞である。文中宗教臭いくだりがミこころゝあるが、詩人が其内容に於てそれ〴〵個性による異つた詩を抱ける如く、眞の宗教は各人各様に別々の信仰を持つものゝ私は信する。この見地からして、宗教と詩は同質のものと思ふ。即ち宗教は詩の球根であつて、詩は其根より咲き出づる花にでもたごへんか。

信仰の無い處から詩は生れない。信仰の意識はないにしても有るにしても。

## 鼻

昭和二、十二、九

### 庄萬よし

芥川の出世作は鼻であつて、ベルジユウツクの特長も鼻であつた。それ程にもないが自分の鼻は自分ながら特色のあるのに敬服するこゝがある。

歌麿に見せたら如何描くだらうと思ふ程偉大な口徑を持つ圓形の鼻腔は小指や中指で封鎖するこゝは出来ない拇指をぐつぐつ詰めるこやつこゝはいになる面積を持つてゐる、外壁が薄いので俯向き加減になるこ人様に目立たないが、仰向ひて咲笑するこ偉大な口徑を對手に開放して照準誤らずんば敵を吹き飛ばしたり、鼻であしらふこゝが出来る。鯨を煮た鍋に盛り上る水菜をバクつく時分に顔面筋の中心をなしてゐるこの偉大な口腔の運動

は池部均や岡本一平のものでなくて正しくロケーションに價するものである。

同じ偉大なる鼻でもクレオパトラや小山内薫のやうな高貴なものでなくて僅かに鼻梁を認め得る程度の高さで、口腔の若干空を仰いでゐる處は動物園の猩々に劈

疵した粗野そのものである。

足が大きいれば米搗が出来、手が大きければ鍛冶屋が出来、眼が大きければ達磨になれる、口が大きければ大江山の

主になれる、わが鼻腔の偉大なる天れ如何せんやの嘆きがあるばかりである。

幼時鼻カタルに胃されて四六時中青涕の絶間がなかつたこの鼻は嗅覺の神經衰弱に陥るこゝ激しくWCで幻想を練る時分

には非常に幸福を感じる。生理學者の説によるこゝ、人間五感のうちで、一番必要

の少いのは嗅覺であつてもう一萬年も経てば嗅覺は消滅して仕舞ふさうだから餘

程進歩した鼻であるこゝも言ひ得る譯であ

る。

一日に百人の客に接する私は百の鼻を研究し得るため、同病相憐の偉大なる鼻腔の持主を調べた結果、次のやうな言葉の性質を發見した。

「やゝ遣りつ放し」「樂天家」「祖枝大葉」「洒々落落」「度量如海」「肉慾旺盛」「牛飲馬食」「直情徑行」「光風晴月」「短刀直入」「言行一致」等々の

光明方面に慎重の態度を缺く僅かな暗黒方面がある

現代の人では加藤巽天、濱口ライオン、大谷光瑞、社友放馬、故人では先代大隅

大夫等が大鼻組の錚々たるものであつて

義平、將門、義仲、清盛、日蓮、尊氏などもさうでなかつたかこ想像せられる。

私の三年前から鼻茸が片一方の腔口を塞いでゐるが呼吸は他の腔口で充分であるから、必要を認めるまでは切らない積りである

### 南船場より

安井寛

義兄方よし、余を誠しめて曰く「ひろしはいつも句を貶すばかりで賞める事を知らん」こいふ、そう云はれるこそうかも知れぬが、自分としてはいゝ句はいゝこして受けいれ、缺點は缺點として非議してをるので、多くの座中、ほめるこは誰でも云ふから云ふ要もないので、そのまゝにして居るが、難する事は誰も云はぬから、つい自分が口を出すため、さうく「貶し掛り」の稱を得て居るのだと思ふ次第、新年初頭にあたつて平にお詫びしてをく。

畫家鍋井克之氏の友人にA云ふ人があつて、またAにB云ふ友人があつた。AB二人が某所で寫生をして居て、Bの作が將に成らんこするさきAが暫らく畫面をみつめて「君の今日の製作は頗る鍋井克之君の畫風に似て居る」こいふBの面色は忽ち變り、將に最後の筆觸を加へんこする筆を一轉して、滿面朱を注

ぎつゝ、全畫面を塗沫してしまつた。Aはそれを見てびつくり、そのわけをたずみ、Bは双眼に涙を流さんばかりに云ふよう、

「僕が往年一作を帝展に出品して、頗る好評を博した、然るに獨り鍋井克之のみこれを非難したので、其口惜しさ數年を経た今日でも忘れず、鍋井克之の名を聞くだけでも不快なのに、況んやこの作が彼の畫風に似て居るはもつての他だ」  
ミAはこれ聞いて憤然としたといふ事である。

この話を聞いて自分も空恐ろしくなつたのである。然し川柳家にB程の眞剣さがあるなら、川柳道の伸展はけだし偉大であらうとも思ふ。  
選評は至難中の難事である。ただ誠をもつて私心なく作にのぞむ他あるまい。川柳雜誌主幹路郎先生の選評振りについて余は「個性尊重主義」だと思ふのであ

る、即ち作者個々の持味のよいところをなほ一層よりよく導かうとする方針だと思ふのである。作者自身が氣づかずに居る長所をみつけ出して、それを延し短所をためてやるを云ふ、親切な選の仕方だと思ふ、この故に「善導主義の選」だとも云へると思ふ。

然し先生も神ではないから、さきには本人の意志に反した導き方があるかもしれぬが、決して作者に媚びて、ゆるやかな選なきされて居ない事は、投句者自身には、あまりに痛切に、わかりすぎて居る事と思ふ。

自己の句風の型にはまらねばこそ、さく捨てるまいふ、双葉をつみさるような選に勝る事、數等であらねばならぬ。

また寛選、嚴選といふ事は選の標準の問題で決して量の多少には、かゝはらない多數の選句が發表されても、それが嚴正な批判の上に選されたものなら、そして高い標準によつてぬかれたものなら、嚴

選であつて、寛選ではない。

そうしてこゝにいふ事が云ひ得ると思ふ、多くの投句の中からは、いゝものが多く得らるゝのが大抵の場合には必然である。

—二、二二、一〇—

## 麻生先生の

## 選句眼

北澤高峰

川柳に手を染めてより約三屆霜「十七字詩型に個性の餘韻を響かせて」等三分而倒な事も胸氣に覺へ自稱川柳家になつた。

「私の句風を模したり雜誌に依つて句風を變へる様な作家でない事を切望する此れは近作柳櫛櫛に於て麻生先生の申された言葉である。先生の近作柳櫛の選句には流石に右の主張が當嵌つて居る。

未だ體驗のない私が新世帯の句や女房の句を投句しても未だ一回も活字に並べ

られた事はなく、先生は私の新世帯や女房の體験のなき事を知る如くなり。

私としては大分自信の句の積りであるが悲しい哉體験なきため無理の句や模倣の句になつてしまふのだらう、而して先生の主張に當嵌らない譯なのだ。

嗣つて私の生活苦の表現たる社長の句さか給料の句さかは投句の都度一、二句は活字に並べられるのです。此れが所謂麻生先生の言はれる眞摯の句なのだらうと間接に教訓を得ました。又同時に先生の選句眼の凄さには敬服致しました。

「名句は體験より生る」御蔭様にて此んな眞理？を得ました(一一、一二、一三)

# 時代は進む

## 源代まさを

善い人ばかり見る事ができる人は幸福である。悪い人ばかり見なければならなかつた人は禍である。しかし、ほんまうに人間が人間らしい生活を生きてゆく

ためには、善人をも知り悪人をも知らなければならぬ。人間はみんな善人ばかりだと思つてゐる人はやゝもすれば餘りに早くあまりに狭く地上に樂園を築き上げる。人間はみんな悪人ばかりだと思つてゐる人は、日々自分自身の爲に暗い墓穴を掘つてゐる

ミ或る人が云はれましたが、私共が川柳のすぎこし方に悪い半面のあつた事は他面に於てその急激な喜ぶべき進歩發達を語るものだと思はれるものです

今日では川柳の意義も過去のものは餘程違つた見解で私共に相對してゐるのです。ですから川柳は或る一部の人、いや世間大部分の人々に解釋せられて居るやうな、單なるウガチのみでは駄目です。

目醒めた女が人形から人間へ、人間から社會へミの道行を経つゝ進んだ如くに目醒めた柳人もこれと同じ道行をなして進みつゝ個人ミしては徹底的に獨立し、

自覺し團體的には活動せなければならぬと思はれます。

團體的生活を識らぬ人は眞に個人ミして自覺した人ではないのです。

## 天満支部新年句會

並に川柳展覽會公開

天満支部主催の下に一月十一日正午より市電寺町停留所角智源寺で開催

兼題「双六」三句 會費 金貳拾錢

## (十九頁より續く)

ミこへ行くもんだと内をついさ出る (同 七)

れか子子をあやして亭主叱られて (同 七)

これを見て廻りくささを感じない。ありの儘を卒直に述べてゐるに過ぎない。之はご明快な單刀直入の短詩型が他にあらうか、殊に文語脈から離れて俗語でも口語でも何等顧慮する事なく使用してゐる所に軽いミ云つた感じは一層強く起つて來ると思ふ。(以下次號)



# 各地柳壇

## 川柳雜誌社 聯合句會 大阪支部

十二月五日、日本橋俱樂部で開催しました川柳雜誌社大阪各支部聯合句會は、支部幹事各位の努力で近來にない盛會でした。畢竟川柳が社會詩であり自由詩であり日本人に最適切な詩形であるいふ吾々の信條が、有識階級に認められた結果と思ひます。席上青森へ赴任する飯山氏の袂別の挨拶があり、路郎先生は支部句會についての感想を、利用して選句につくされた事を鳴謝します。來會諸君、殊に京都神戸の遠方から見へた各位と、景品を寄贈して頂いた、西本三笑、八木壽仙、安井ひろし、岩木素人、松盛琴人、糸屋町支部、天満支部、道頓堀支部と深く感謝します(支部幹事)

(參會者) 路郎、萬よし、伴内、青子、三次、武藏坊、愚源太、不愁、享三、二柳子、毒仙、文蝶、十紫、砂人、其象、孤舟、不二綱、蒼梧樓、双葉子

松耶、朝陽、飯山、義情、平八、舟々、二南、かほる、貼美、冷笑、觀月、鳴玉、ひろし、きよし、炭車、狸仙、二竹、太閤、琴人、川洞、啓吉、一醉陽喜亭、山雨樓、溪水、雅流、源坊、紋太、素人、忸子、亂耽、愛知、清太郎、京二、新水、紫明、翠峯、凡平、閑路、鶴峯、迷亭、虛白、百日紅、木三、二水、理庵、久耶、彩秋、國次、松山子、眠聲、秀甫、青司朗、祇梵、百雷、加香、多喜女、柳骨、三笑、笠人、俊治、悟郎、蜀洞、流星、三平、學勇、翠川、双柳、馬行、赤城。

後家 醉うて 變のほつれを唄て去に 多喜女

跡取は今年十一後家若し  
深切が徹底きれた後家迷ひ  
若後家の諦めきれぬ風姿で  
道理ある後家の言葉を持って  
餘し後家死んで醜さあこのこされる  
女丈夫さいはれる後家の太い眉  
同情があまつて後家はおちつけず  
玄關を繕切にし後家は住み  
單經に乗つた後家の心なり  
一週忌がすめば後家も思つて居  
染めてるんだ後家の評判  
警戒をするのへ後家のうすわらひ  
後家されど坐食してゐるには非ず  
カシテキを煽ぎ細々後家を立て  
後家立て、から喜多村が好きに  
娘あり金あり後家の派手な縮  
後家になつてから教會の用がふえ  
水のたる黒髪後家が立てられず  
さ、やかに後家文房具屋を始め  
應接間後家の遊味を見せること  
連れ合の日に患うてさびしがり  
うはさよりさきに後家はん子を  
後家になつて亡夫の愛を知り始め  
下駄箱をあけて後家のものばら  
里の親ほど菩提寺でいたはられ  
預金帳ながめて後家をさほして來  
髪結のその腕後家を立てさせる  
なにくそと後家は子供に絹を着せ  
やこはれて來てゐる後家の若々し  
淋しさが氣樂さになり後家は肥  
女手で育てたことを泣いてゐる

百 琴 人 鹿 杏 三 不 二 網 蜀 洞 青 子 村 蒼 梧 樓 毒 仙 萬 一 二 町 竹 木 後 家 立 て 娘 有 り 金 有 り 後 家 の 派 手 な 縮 後 家 に な つ て 亡 夫 の 愛 を 知 り 始 め 下 駄 箱 を あ け て 後 家 の も の ば ら 里 の 親 ほど 菩 提 寺 で いた は ら れ 預 金 帳 な が め て 後 家 を さ ほ し て 來 髪 結 の そ の 腕 後 家 を 立 て さ せ る な に く そ と 後 家 は 子 供 に 絹 を 着 せ や こ は れ て 來 て ゐ る 後 家 の 若 々 し 淋 し さ が 氣 樂 さ に な り 後 家 は 肥 女 手 で 育 て た こ と を 泣 い て ゐ る

上京をさして淋しい後家である  
未亡人多く語らず寫される  
(人)後家の子と云はるゝ汝はななる  
(地)幽靈は出んか後家をいいやち  
(天)後家の氣を知るか女中次いやち  
(軸)後家の眼にさまる男のひよひよ

胡座 紋 太

うい奴を胡座の中へ呼びよせる  
親分の胡座へ機嫌取りにゆき  
今日も亦胡座でくらす肥後守  
胡座へ抱けばちひさい欠伸をし  
關取け胡座をかくいてゐてしびれ  
胡座も飲めさうもない酒を見る  
雲齊で胡座をつゝむ肥後守  
あぐらの中に牛なべにほつまり  
親しさは胡座のまゝで碁を始め  
話もう胡座になつて落ちて来る  
下宿して父に遠慮のない胡座  
怪談に胡座のまゝでしひの胡座  
いつの向にやら椅子の上の胡座  
胡座もう勳勝負へ腹を立て  
氣安さはお樂に云ふご察人  
何思案するの胡座あごをなで  
胡座組んで素足を見るも久振り  
流連の胡座へ急な文が来る  
大胡座遠慮の要らぬ世帯です  
交番所胡座になつて飯をくひ  
肩入れは胡座の上へ火をおこし  
れころんで胡座の友に茶をもらひ  
苦くなる酒に胡座を組直し  
氣安さは胡座かいたりすわつたり

舟々 同子 武白 赤城 選郎 路柳 双柳 祇梵 狸仙 舟々 迷亭 松耶 松耶 三次 武藏坊 馬竹 素行 源坊 翠峯 紫明 亂耽 三平 琴人 百雷 久那 鮎美 蜀洞 飯山

胡座から胡座へ猪口がまはされる  
大胡座始めて吾のからだなり  
三つ指に胡座のひざをやり直し  
女の子父の胡座が氣に入らず  
子澤山胡座の中へ一人入れ  
除隊兵胡座のくせを詫げんなり  
高利貸胡座をかきはげんなり  
ご免やさいふが早い胡座かき  
職人で御座りまする胡座かき  
(人)親方の大事胡座のまゝで聞き  
(地)割込んでおいて胡座はす  
(天)一通り胡座にさせて仲居立ち  
(軸)一場の挨拶胡座ゆるされる

寄贈品

當てつけにしては立派な寄贈品  
名案は妻が選んだ寄贈品  
三人で買ひに来てある寄贈品  
投資のやう寄贈品積まれば  
だゞ謎のやうに並んだ寄贈品  
寄贈品事こまゝ書き添へて  
戴かすやうにまくばる寄贈品  
寄贈品しみがあつても云へぬ也  
寄贈品南地さあるが目にさまり  
寄贈品その心をば受けてくれ  
友達の趣向をほめる寄贈品  
寄贈品買つたまはしまつさき  
令嬢がしつゝ運ぶ寄贈品  
寄贈品おだてのやうにくれてやり  
寄贈品すてつべんから値ぶみすり  
寄贈品中の一つはばをさる  
寄贈品未座の方には聲がする  
寄贈品職の下へ積みかさね

孤舟 凡平 義情 其象 聞路 笠笑 三笑 新水 同紫 十紫 紫明 舟々 紋太 山選 松耶 愛知 双葉子 亂耽 不二網 鳴玉 川洞 路耶 京二 冷笑 迷亭 武子 二竹 山雨 翠峰 朝陽

置時計寄贈ご記して止つてる  
寄贈品拍手を以て授けられ  
寄贈品亭主頭をさげただけ  
制前の寄贈品をば事づかり  
寄贈品幹事べん見せに來り  
寄贈品たぬまり種んだまに更け  
寄贈品豫算があつてさだまらず  
寄贈品何の何兵衛さらされる  
寄贈品へなんのかんのさ飲んで  
不景氣に寄贈の金もへらして  
寄贈品仲居の手からさくせられ  
寄贈品吹田をさきてあけてみる  
寄贈品赤さ白さで飾りつけ  
講元のあこでわけてる寄贈品  
お供へば寄贈斗りの地藏尊  
寄贈品みんな抽つたさこであけ  
まけさして買つたさ見ぬ寄贈品  
寄贈品たゞ北濱さあるばかり  
寄贈品寄拔を幹事嬉しがり  
(人)寄贈品わしよゝで持ちこ  
(地)この人にして領けら寄贈品  
(天)寄贈品ほんまかいなさ貰ふ

明日

子供またあしたくごだまされる  
どうなるか分らぬ明日を考へる  
生活に明日なく酒のみつゞけ  
空模様にたかく明日の髪を刈り  
明日からの事極道は考へる  
明日来るさ眞面目に聞くも面白  
子の無理を父親明日の事にする

虚白 蒼梧樓 柳骨 祇梵 三平 不笑 三笑 彩秋 双柳 鮎美 同雷 同雷 久耶 同醉 同笠人 同笠人 同馬行 同馬行 二南 綱選 松耶 双葉子 亂耽 悟耶 笠人 文蝶 聞路





錠前をあつて市場までの用  
歸つてる管錠前はおりてあり  
邪氣くさいなあさ錠前あける用  
泥棒の目に錠前が面白く  
錠前の指紋犯人まだ知れず  
同 眠 聲

手拭を腰に爺ヤの強いこま  
一平の漫書手拭になつてゐる  
鉢巻をして居てあたり探して居  
手拭をかぶり女將も箒持ち  
湯の宿の窓へ手拭二つ干し  
入學の子へ手拭のさらをやり  
日に焼けた顔で手拭めだつ事  
手拭のこんな水の悪い  
手拭へ區別なされるトラホム  
結ひたてへ手拭小鳥の餌を替へ  
手拭の汗はあの山越へて来る  
手拭の洗濯床屋は今日休み  
同 眠 聲

おかしさは秘密に旅をつゞけて居  
四角四面な秘密に困り果て  
よい年ふしてご秘密がばれてくる  
金がなくなれば秘密を云ひに来る  
その秘密みかん畑の土を掘り  
秘密でもあるか一日そわそわし  
其の秘密だん／＼自分がこわくし  
同 眠 聲

題(事務所) 馬留守氏  
のんびり事務所つては課長留守  
ストロアに事務所窓を少しあげ  
給仕／＼で事務所暮れてゆく  
はい／＼と云々くねは事務所也  
同 親 月

假事務所よいこまいたア音聞へ  
假事務所嵐の中に一つ建ち  
愛想よく女將事務所を通りぬけ  
取調べますご事務所へつれてくる  
假事務所看板がちご過るなり  
思ひ出したように事務所へ社長  
事務所事務所に見せビルゲンア  
當直の事務所にビヤノ流れて来  
あてあつて事務所一足先に出る  
支拂は五日事務所はドアをしめ  
ストライキ事務所へ巡查またば  
假事務所外套五寸釘にかけ  
同 眠 聲

師走の句會を三日午後壹時から開く、硝子  
窓から射す太陽は十二月まは思へぬ程の暖  
かさである。二柳子、馬行、三笑の諸先生と珍  
らしい飯山先生が御出席下さいました。  
同 眠 聲

起されてうめいた譯を話し飯山選  
思ふ事遠ふ處で夢が覺め  
しつくりと達ふて話した夢も醒め  
い／＼夢の今一息を起される  
煩悶は夢に續いて消えもせず  
戀の夢チツトは嘘のこゝもあり  
許されぬ夢の續きを考へる  
夢ばかり見て母親の案じてる  
戀人／＼夢の事まで書いて出し  
ごんな夢見てゐるでせう親心  
うた／＼寝は寒くなつたり夢は醒め  
同 玉 政

目か醒めてそこら見廻す恐い夢  
今朝の夢に望みを托し家を出る  
ふご切れてスクリーン夢の場を變  
さりませの夢から醒めて寒い事  
夢にし／＼見てもあんなり遠い事  
笑  
同 馬 行

婦人科が父親くさなさらけ出し  
子供醫者急に答が出来にくくし  
ウマチにヤイトも醫者は云ひ  
軍醫たゞにつき笑つてメスを持ち  
無口なる醫者ではあるがよくば  
別の間へ行つてお醫者が何か云ひ  
奥様が看護婦もする村の醫者  
苦むね醫者眠むさうにやつて来る  
若い醫者寝ざめの悪い時もある  
はやらない醫者で難病なほされる  
簀醫者の話に自分かと思ひ  
氣の毒な家を無口で醫者は出る  
醫者の云ふ程新薬も利いて来ず  
論文をやめて開業するつもり  
同 杏 三

院長と白髪の方と間違はれ  
さりまかれ醫者臨終を長く診る  
手を洗ふ醫者に病名定まらず  
はやらない醫者の科目の多い事  
母そつと歸つての歸りに聞いて見る  
轉地かか歸つて醫者に賞められる  
迷子(席題) 馬行選  
入學に漸く取れた迷子札  
迷子札讀み／＼巡查つて来る  
樂隊を迷子泣き／＼ちよつと見る  
同 玉 政

川柳 蟹ヶ池支部句會(大阪)  
雜誌社  
安西杏三報  
同 眠 聲

題(兼題) 飯山選  
起されてうめいた譯を話し飯山選  
思ふ事遠ふ處で夢が覺め  
しつくりと達ふて話した夢も醒め  
い／＼夢の今一息を起される  
煩悶は夢に續いて消えもせず  
戀の夢チツトは嘘のこゝもあり  
許されぬ夢の續きを考へる  
夢ばかり見て母親の案じてる  
戀人／＼夢の事まで書いて出し  
ごんな夢見てゐるでせう親心  
うた／＼寝は寒くなつたり夢は醒め  
同 玉 政

目か醒めてそこら見廻す恐い夢  
今朝の夢に望みを托し家を出る  
ふご切れてスクリーン夢の場を變  
さりませの夢から醒めて寒い事  
夢にし／＼見てもあんなり遠い事  
笑  
同 馬 行

婦人科が父親くさなさらけ出し  
子供醫者急に答が出来にくくし  
ウマチにヤイトも醫者は云ひ  
軍醫たゞにつき笑つてメスを持ち  
無口なる醫者ではあるがよくば  
別の間へ行つてお醫者が何か云ひ  
奥様が看護婦もする村の醫者  
苦むね醫者眠むさうにやつて来る  
若い醫者寝ざめの悪い時もある  
はやらない醫者で難病なほされる  
簀醫者の話に自分かと思ひ  
氣の毒な家を無口で醫者は出る  
醫者の云ふ程新薬も利いて来ず  
論文をやめて開業するつもり  
同 杏 三

院長と白髪の方と間違はれ  
さりまかれ醫者臨終を長く診る  
手を洗ふ醫者に病名定まらず  
はやらない醫者の科目の多い事  
母そつと歸つての歸りに聞いて見る  
轉地かか歸つて醫者に賞められる  
迷子(席題) 馬行選  
入學に漸く取れた迷子札  
迷子札讀み／＼巡查つて来る  
樂隊を迷子泣き／＼ちよつと見る  
同 玉 政

川柳 蟹ヶ池支部句會(大阪)  
雜誌社  
安西杏三報  
同 眠 聲

題(兼題) 飯山選  
起されてうめいた譯を話し飯山選  
思ふ事遠ふ處で夢が覺め  
しつくりと達ふて話した夢も醒め  
い／＼夢の今一息を起される  
煩悶は夢に續いて消えもせず  
戀の夢チツトは嘘のこゝもあり  
許されぬ夢の續きを考へる  
夢ばかり見て母親の案じてる  
戀人／＼夢の事まで書いて出し  
ごんな夢見てゐるでせう親心  
うた／＼寝は寒くなつたり夢は醒め  
同 玉 政

川柳 蟹ヶ池支部句會(大阪)  
雜誌社  
安西杏三報  
同 眠 聲

落ち付いて呑む覺悟をうたがはれ  
覺悟してゐるのへ一ツ念を押し  
雷相

川柳 加古川支部 (兵庫縣)

十一月廿二日水田久米仙居にて  
父・定宿、眼鏡  
加納 嶽堂 報

樂隊に飛出して見る父もあり  
田舎から父が来る日に二日酔  
亡き父に意見せられる夢になり  
父の前放蕩息子恐れ入り  
朝歸りまたかくと父は云ひ  
定宿が娘の鳴田氣にかゝり  
定宿を立つと娘は禮に来る  
號外に眼鏡くささかしてゐ  
風呂へ来てあはては、はず眼鏡  
だて眼鏡娘が少し氣にかゝり  
念風 落陽

久米仙 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂

鴨鍋へ妻の心も思ひやり  
鴨一ツ吊して荒れさなつて行き  
鴨の鳴く聲久々の故郷なり  
鴨料理 理隣座敷も鴨料理  
夜の道つて足許で鴨が飛び  
宵越しの金は使はぬ鴨料理  
夜遊びを叱るかの様鴨の鳴き  
鴨鍋へ先輩振りを見せて呑み  
席題「唐紙」

唐紙の破れて子供あるさ知り  
唐紙をあけるさ酔つた客が居る  
唐紙を外つすや廣い家になり  
唐紙へ娘つゝをささぐかせ  
唐紙へ師匠の子供よいかせ  
賞められて居るさ知らぬ襖越し  
唐紙を開けるさ知つた人ばかり  
席題「額面」

額の字も斬つた利那の返り血で  
珍客をかみつく様な額の虎  
眼鏡額 額はちつほく懸つて居  
扁額に日の出を入れて明日を待ち  
全盛の頃 僂はせる額一ツ  
席題「危険」

旅の父危険な所見て戻り  
危険なご念頭にない決死隊  
丸木橋渡りふせてホツさる  
大使命探照燈の中を行き  
席題「覺悟」

親もも覺悟を決めて灯を見詰の  
絞首臺覺悟をきめた眼をつむり  
覺悟してゐるさは云へど顔の色  
笑太郎 冬木立 同 同 雷相

雜踏の中を迷ひ子走つてる  
迷ひ子は巡查に馴れて菓子を食べ  
迷ひ子の返事はわつさ泣くばかり  
小便をこらへて迷子泣き續け  
迷ひ子へ面目もなく親が来る  
(佳)迷ひ子の泣き草臥き親に逢る  
(同)迷ひ子に巡查一錢損をする  
(轉)迷ひ子の親と云ふのが子澤山  
冬一席題

雪邊磨寒くないか火燧から  
火燧から離れさもない朝さなり  
火燧から指圖をしてる年になり  
燒芋の熱さを抱いて居るも冬  
粕汁の匂ひ冬の日もう暮れる  
はい下駄夫にも冬の痛さなり  
上かん屋も冬を意識する  
橋の下乞食も冬を意識する  
晚酌に障子は冬の音を立て  
雨隣り貸家のまゝで冬になり  
金のこまで冬の空地にうづくまり  
同 馬行 飯山

川柳雜詠社 創立句會々報(鳥根縣)

十二月十一日 於雷相居

兼題(鉢巻) 尾添雷相選

(佳)鉢巻で魚屋は景氣よく這入り  
(佳)鉢巻は遂に大きく唄ひ出し  
(佳)手も足も出せず鉢巻恐れ入り  
(人)鉢巻をはいたて大工飯にする  
(地)應援隊鉢巻で来て喜ばれ  
(天)鉢巻の手前今更逃げられず  
席題(鴨) 互 松隠

鹿村 彦春 一柳子 二柳子 杏三 同 馬行 飯山

川柳 柳 加古川支部 (兵庫縣)

十一月廿二日水田久米仙居にて  
父・定宿、眼鏡  
加納 嶽堂 報

樂隊に飛出して見る父もあり  
田舎から父が来る日に二日酔  
亡き父に意見せられる夢になり  
父の前放蕩息子恐れ入り  
朝歸りまたかくと父は云ひ  
定宿が娘の鳴田氣にかゝり  
定宿を立つと娘は禮に来る  
號外に眼鏡くささかしてゐ  
風呂へ来てあはては、はず眼鏡  
だて眼鏡娘が少し氣にかゝり  
念風 落陽

久米仙 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂

川柳 柳 加古川支部 (兵庫縣)

十一月廿二日水田久米仙居にて  
父・定宿、眼鏡  
加納 嶽堂 報

樂隊に飛出して見る父もあり  
田舎から父が来る日に二日酔  
亡き父に意見せられる夢になり  
父の前放蕩息子恐れ入り  
朝歸りまたかくと父は云ひ  
定宿が娘の鳴田氣にかゝり  
定宿を立つと娘は禮に来る  
號外に眼鏡くささかしてゐ  
風呂へ来てあはては、はず眼鏡  
だて眼鏡娘が少し氣にかゝり  
念風 落陽

久米仙 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂

川柳 柳 加古川支部 (兵庫縣)

十一月廿二日水田久米仙居にて  
父・定宿、眼鏡  
加納 嶽堂 報

樂隊に飛出して見る父もあり  
田舎から父が来る日に二日酔  
亡き父に意見せられる夢になり  
父の前放蕩息子恐れ入り  
朝歸りまたかくと父は云ひ  
定宿が娘の鳴田氣にかゝり  
定宿を立つと娘は禮に来る  
號外に眼鏡くささかしてゐ  
風呂へ来てあはては、はず眼鏡  
だて眼鏡娘が少し氣にかゝり  
念風 落陽

久米仙 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂 嶽堂







ビルテンク事務所の敷が百五十  
ポナナスの話して行くビルテンク  
ビルテンク標札はほぼ掛けてある

悪源太  
平八  
双葉子  
選

(兼題)折詰 詰 互選  
折詰の客さばかして腰をす  
我黨の天下は折を立つて食ひ

一晚香  
一耶  
若梧樓  
悪源太

折詰と弟子だけ無事に戻つて来  
折詰をもつて巡査と二人づれ  
折詰がみだれる程に酔ふてゐる  
ビクニツク汽車辨らしい折をもち

同  
同  
同  
同

(席題)夜業 互選  
勘定日矢張り夜業をするこきめ  
約束があつて夜業の手につかず

狸仙  
柳川樓  
悪源太  
武藏坊

親方が歸つて夜業しまひにし  
夜業ださ云へげ親父も信用し  
火花さぶ夜業に植の音がさけ  
内職の夜業に五燭底くたれ

同  
同  
同  
同

(席題)牛 乳 互選  
牛乳のちからで今日は起き上り  
牛乳で育てました抱かせて見

晚香  
蒼梧樓  
双葉子  
選

離乳から兄は牛乳にやせて行き  
(席題)桃太郎 互選  
故郷を川かと思ふ桃太郎

狸仙  
柳川樓  
蒼梧樓  
双葉子

桃太郎の話にせむ桃太郎  
猿は先つ物見の役で木から落ち  
寶物の始末にこまる桃太郎  
(席題)手袋 互選  
手袋をみな眞黒にしてしまひ

耽三  
悪源太  
蒼梧樓

手袋がボクットにない月曜日  
手袋にハッキリせない握手する  
(席題)鏡  
ほれられて見れば鏡にほれぐし  
女湯の鏡をそつと見ては入り

同  
同  
同  
同

い、身体鏡の前で力んでる  
此部屋の悪事は鏡だけが知り  
手鏡へほれられて来た顔を見る

悪源太  
若梧樓  
同  
同

京城川柳句會  
十一月二十六日午後六時清水萍花氏主催句  
會開筵、先記席題を課し披露前に余の京城柳

同  
同  
同  
同

壇の柳論を賑はせ度き希望、續いて柳樓十二  
篇放送迄の経緯を述べ「鼓」十月號姪千省二  
氏に對する回答文は、四十餘日を經過したる

同  
同  
同  
同

二十三日長文及重復の理由を以て返戻し來  
りたる回答文を朗讀、同誌十一月號省二氏記  
事末尾に對する回答文も朗讀して其經過を

同  
同  
同  
同

發表した。其れから宿、席題は拍手を以て迎  
へられ、それぞれ選者によつて披露された結  
果、一等柳平氏、二等寶月氏、三等二葉里氏に

同  
同  
同  
同

決定、十時半盛會裡に解散、當日の出席者は  
だるま、呑氣坊、美昭、柳平、兵六、秋樂、みや  
こ、天祐子、右近、美郷、二葉里、夕村、溪月、寶

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊

月、紅葉子、風鈴坊、小舎、いるか、秋外、天骨  
春秋樓、南佛、京子、狐大門、愛子、青原、荳頭  
子、千流、喜樂、大明人、光月、うらなり、主人  
と萍花と鯨左衛門の三十四人で二名の婦人  
も加はつた。  
宿題 馨 寶月選  
五 客

同  
同  
同  
同

萍花  
いるか  
秋外  
美郷  
荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

美郷  
だるま  
天祐子  
呑氣坊  
千流  
うらなり  
天骨  
柳平

荳頭子  
大明人  
萍花  
右近

天祐子  
秋樂  
柳平  
南佛  
千流  
美郷  
美郷  
寶月

五 客

鳥籠を包んで宵を市へ来る 天祐子  
 傳書鳩足に秘密を頼まれる だるま  
 十姉妹人馴れのした首をまげ 天祐子  
 水鳥に寄ればオモエー先に抜け 南佛  
 鐵砲を持たぬ日鳥によく出逢ひ 二葉里  
 (人)風の音風も動かぬ鳥一羽 老頭子  
 (地)枝近く鳥もち下駄をぬぎず 柳平  
 (天)親鳥に葉はやかましい聲に 二葉里

五 客

貧乏になれて無慾な男なり 右近  
 慾が無き過ぎる侘を持って餘し 同  
 子澤山小さい慾のもてが出來 柳平  
 買仕事損得でない慾で出來 秋外  
 女の子持てば男の子が慾しい 天骨  
 (人)あんまりな慾が周囲を遠ざけ 春秋郎  
 (地)美粧院慾を満たして女出る だるま  
 (天)折詰をしがま包んで酔ゐる いるか  
 (軸)へそくりを皆債券に替へ来る

五 客

温突のききが自慢の冬籠 小大門  
 冬籠でもなく冬が働けず 秋外  
 冬籠する氣で狭い家を借り 右近  
 足音を遠く聞いてる冬籠り 二葉里  
 ストープを置いて短くなつて寢る 春秋樓  
 (人)花札を將棋に出来る冬籠 寶月  
 (地)設計圖丈けが出来てる冬籠 寶月  
 (天)冬籠誰れかゞ来ればよい欠伸 兵六  
 (軸)冬籠スキーの記事へ氣が動き

電氣柳壇句報 (大阪)

安井ひろし輯

此の手紙確かに受けたポスト鳴り 柚蘭坊  
 ほんやりと隣も一時うつて居る 郊村  
 支那うざ眼鏡をぼつさくもら 同  
 別荘の冬へ實が落ち草が枯れ 貼美  
 ふじ穴に自分の心みらるゝか 同  
 罵れるように鮮人むつまじい 同  
 履歴書の當てにならない墨をすり 同  
 辻占の聲ほそくさ雪になり 仙湖  
 今朝はもう灰になつてる骨拾ひ 同  
 白痴の子しくねりむつり飯を食ひ 芽明  
 さらくさすべる日影のつれなけれ 同  
 大晦日の夜は水色に明けぬ 同  
 げんぞくをして北風に親しまむ 松郎  
 北風にさらばをしてる格子先 同  
 北風へ女の智慧もむだになり 同  
 松の内丁稚だんぐ金かへり ひろし  
 眠れぬいまにひもじい十二月 同  
 掌の砂バラバラになる 同

糸屋町小集

川合舟々報

十二月一日夜  
 題「職工」  
 風呂屋もう職工連が来る時分 舟々

會報の書き方について

地方柳壇も益々發展するので、大いに意を強  
 うしてなります。昭和三年と共、面目一新、  
 努力して佳句をお寄せあるよ、希望します。  
 會報の書き方がまち／＼で、整理上困ります  
 から、左の形式で御報知下されば大歓迎都合  
 です。用紙廿字詰十行半紙型原稿紙の事(編  
 輯局)

何々會會報 (大阪)  
 一月七日  
 會の記事 松の内 ○○選  
 兼題 柄井川柳報  
 佳句

人  
 地  
 天  
 軸



# 編輯後記

▼諒開明け後の新春を賀し奉る今年辰の年で世間では景氣がよくなる云つて居る。川柳雜誌も今年はウツンと内容を充實し我が主義主張を飽迄徹底せしむべく、勇猛精進し、景氣のよい話を諸君に聞かせたいと考へて居ます。

▼普通の一般雜誌でも廢刊休刊が續出する中に、我が川柳雜誌は大正十三年一月創刊以來滿四ヶ年間一回の休刊も爲さず、今や第五卷第一號を發行し、川柳雜誌存在が勿論一般雜誌界から驚異的存在として注目されるに至つたことは區へに、愛讀者各位の熱誠と寄稿家諸氏の援助の賜と厚く感謝する次第です。

▼過去を回顧せず何時までも未來に生きたいと思つて居る。我々は本誌の内容を充實し、我が主義主張を飽迄徹底せしむべく勇猛精進する決心で居ます。寄稿家や愛讀者各位の御援助を

只管悞願します。

▼毎號雜文の投稿が多くなつたことは喜ばしいことであるが、餘り長い爲に、全部を限られた紙面に掲載することが出来ないので遺憾さします。今後は成るべく短かくて山椒は小粒でヒツヒツ辛いところを見せて頂きたいと思ふ。又雜文原稿は十八字詰で書いて下さい、編輯上さうして頂ければ大いに助かります。長いものは二回位に掲載出来るやうにして下さい。

▼金澤支部幹事は比賀壽み三氏と宮本銀砂子氏と更迭されました。又酒井駒人氏が神奈川縣平塚支部を、水田黄彩氏が兵庫縣加古川支部を開設され幹事として御活躍下さることになりました。堅實な發展を期待します。

▼本誌の表紙は小出楢重氏が年末多忙の中をわざと描いて下さいました、御厚意を感謝します。岡田三面子、長野晴濱、姪子省二、木村半文錢氏等が特に有益なる記事を寄せられたことは獨り編輯者だけの喜びではないと信じます。

▼田中辰二氏の「川柳の本質」は一般川柳家が一讀するの價値あ

るものと思ひ、同氏の承諾を得て「國語と國文學」の第三十六號より轉載しました。

▼路郎主幹は大阪朝日の同情週間の爲めに横幅二點と短冊一枚を寄贈されました。横幅は鎧の繪に「蓮地へ今でも藏のかげがさし」の句と梨の繪に「誕生日子をならべてもおもしろし」の句、短冊には「生は梨の皮にもさも似たり」の句を書かれました。

▼萬よし君は本年から心機一轉し、別項廣告記載の「白鶴」の句を募集するのを最後に萬よし川柳の募集を打ち切り、今後は創作に専心することにされたさうです。

▼ひろし君の關係する東京中央美術社から發行の「美術日記」は小出楢重氏の扉繪で、用紙もよく日記欄に罪がないから川柳家の日記としてもよいものです。(定價一圓)本社でも取次ぎます。送料は本社で負擔します。

▼社友喜田飯山君が青森へ榮轉されたので十二月五日戎橋柴藤で送別會を開きました。出席者は路郎、萬よし、ひろし、素人、琴人、松郎、馬行、武子、悟郎、久郎

彩秋、源坊、舟々、毒仙、かほる、双柳、柳骨、朝陽、三笑、英豆、開路、凡平、二柳子、の諸氏出席、酒杯なる感想」を各自が述べ、松郎、三笑、琴人、双柳、朝陽の諸氏が隠し藝を出し別離の悲しみを忘れて又會ふ日を樂しみに愉快に一夜を過ごしました。尙ほ飯山氏は十二月十三日午後八時四十分大阪發一二等急行で出發されました。英豆、ひろし、松郎、悟郎、刀三、二柳子、放馬の諸氏が見送り同氏の行を盛んにしました。又東京支部の柳路、千代二兩氏は赴任の途の飯山氏を迎へて小宴を張つたさうです。飯山氏の東京見わたりの句「不二山がはつきり見わたることも云ひ」

▼飯山氏が青森へ行かれた爲めにひろし氏が編輯局員となられました。(革郎記)

## 移 轉

▽加賀住汀氏 大阪市天王寺區東平野三丁目  
▽小北義丸滿氏 奈良市十輪院町二四  
▽井上史郎氏 大阪府北區天滿橋筋五丁目九五  
▽若林吐露樓氏 山口縣山口町新道二三一八  
▽齋藤松窓氏 京都府葛野郡花園村段の岡二

### 投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又はA型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこと。

### 募集

#### 第五卷第三號課題

一月五日締切。  
(各題十句以内)

- ▼三味線 前田雀郎選
- ▼代筆 矢田右大臣選
- ▼借家 佐々木三福共選  
河野春三

#### 第五卷第四號課題

二月五日締切。  
(各題十句以内)

- ▼卒業 蛭子省二選
- ▼ゴム靴 大島濤明選
- ▼大入 青砥不二網共選  
岩崎柳路

#### 每號募集

- ▼近作柳傳(廿句迄) 麻生路郎選
- ▼古句質疑(三句迄) 蛭子省二擔當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟漫文)

### 社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

### 定 價

普通號 一部 金參拾錢  
新春特輯號 一部 金五拾錢  
八月特輯號 一部 金四拾錢  
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢  
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

### 廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませ御相談に應じます

▼御送金は振替口座穴販七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年十二月廿五日印刷  
昭和三年 壹月 一日發行

第五卷第壹號  
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一 郎  
發行所 川柳雜誌社  
大阪府西成區千本通五丁目七番地  
大阪府西成區千本通五丁目七番地  
振替大阪三一五一四番

### 川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

### 賣 場

(大阪) 大賣捌 サクラヤ書房 其他市内各書店  
(東京仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田、後藤 (函館) 石塚  
(廣島新天地) 山口 (石川縣小松) マコト屋 (京都) 齋堂



# 年 新 賀 · 謹

井 上 凡 平  
田 北區天滿橋筋五丁目九五  
中 中 彩 秋  
中 北區與方町一丁目一八  
中 西 久 郎  
中 北區天神橋筋三丁目二五  
青 野 天 涯  
青 港區大正橋西詰四入ル  
東 山 孤 舟  
東 北區河内町二丁目五  
北 谷 聞 路  
北 北區旅籠町三二一藤繩方  
北 山 悟 郎  
北 北區北森町三二但ノ寺町停前  
北 山 十 字 路  
北 北區北森町三二

謹賀新年

一月元旦

「雪柳」は本年度より確實に出ます

函館市青柳町五〇

渡島川柳社

川柳名句會

龜井花童子

# 正 賀

部 支 町 屋 糸

人 同

- 森 本 赤 城 東區島町(谷中坊)
- 川 合 舟 々 東區糸屋町二
- 和 田 源 坊 遠邊區西風手町一〇三
- 島 田 翠 峯 東區南農人町一山田印刷所
- 中 井 染 子 東區大手通V(内外ノキ)
- 桑 原 京 郎 京都市七條大宮東入
- 朝 田 新 水 市外守口町種之口
- 石 川 双 葉 子 府下北河内郡三郷村大枝
- 岩 城 狸 仙 西成區粉濱町三五七
- 村 野 蒼 梧 樓 住吉區天王寺町一〇四〇
- 八 木 毒 仙 東區糸屋町二

# 賀 正

十二月五日、日本橋俱樂部に於て開催しました川柳雜誌社大阪各支部聯合句會には、萬事不行屆勝にも願わ  
ず 八十九名の熱心なる川柳作家各位の御來會を忝ふしたことを幹事一同厚く感謝致します。  
各支部は例月研究句會を開いて、作句、句評、相送吟、廻覽誌、吟行等の方法で川柳の道に精進してゐます。  
初心のお方は最寄りの支部へ御加入下さつて、川柳の向上に一臂の勞を加へて頂きたく存じます。  
尙本誌のために新たに支部を設けて下さる篤志家各位は早速本社に御相談下さい。  
句會 御禮旁新春の御挨拶申上ます。

昭和三年元旦

## 川柳雜誌社大阪各支部聯合會

- |       |    |       |
|-------|----|-------|
| 住吉支部  | 幹事 | 徳田 双柳 |
| 螢ヶ池支部 | 同  | 安西 春三 |
| 糸屋町支部 | 同  | 川合 舟々 |
| 道頓堀支部 | 同  | 庄 萬よし |
|       |    | 溜寺支部  |
|       |    | 天満支部  |
|       |    | 島支部   |
|       |    | 同     |
|       |    | 同     |
|       |    | 北山 太田 |
|       |    | 横田 眠聲 |
|       |    | 朝 眠聲  |

# ◆ 探偵は …… 赤埴へ！

## ◆ 証信所用素婚

## ◆ 據用在行姻

偽證許害行爲隠匿財産特許侵害其他證據蒐集  
會社商店資産信用乳母會社商店員雇員調査  
家出人拐帶逃亡轉居先不明其他ノ所在搜查  
學生會社員雇人ノ素行夫ノ素行妻ノ行狀内偵  
家柄血統祖先宗教父母ノ性格家庭性格素行學業  
體質交友趣味嗜好技術收入資産外必要事項調査

# ◆ 調査は …… 赤埴へ！

(大阪東區北濱一ノ七(野村ルビ前濱側))

## 赤埴探偵社

電話本局三七一七番

謹賀新年

昭和三年一月一日

都 藤冷笑

大阪府此花區上福  
島北三丁目一二

水 谷 鮎 美

大阪府此區花龜甲  
町二丁目七九

森 石 竹

大阪府下豊能郡麻  
田村箕輪一六五

藤 原 鳴 玉

兵庫縣武庫郡鳴尾  
村本郷西濱六

横 田 眠 聲

大阪府西淀川區姫  
島町五二一一

謹賀新年

昭和三年一月一日

川柳雜誌社蟹ヶ池支部

俗 德 塚 井 一  
大 尾 昭 邦 聖  
鷺 田 玉 昭 邦 聖  
和 藤 谷 玉 昭 邦 聖  
加 地 藤 谷 玉 昭 邦 聖  
加 地 藤 谷 玉 昭 邦 聖  
植 田 壽 邦 仙  
山 田 壽 邦 仙  
安 居 鹿 齋 村  
松 並 光 哉  
藤 田 一 春  
寺 脇 彦 春  
安 西 杏 三  
澁 谷 刀 四  
鹽 田 大 棗 子

賀 正

大正十五年一月十一日第三種郵便物認可  
每月一回一日發行



一部金十錢一ケ年一圓  
朝鮮川柳界の權威

平塚府幸町二八  
鼓川柳吟社  
同人(イロハ順)

願問  
菊川泰平樂  
森田呆氣星  
宮前滿洲流  
福島春魁  
中山柳也  
高岡京平  
岡部可敷  
岡部美州

刊月  
川柳三昧 (一部廿錢)

朝鮮に於ける代表的

川柳研究誌

發行所  
京城府櫻井町二ノ三二  
南山吟社事務所

正 賀

會 二 月 柳 川

稻 吉柳市宮町蛙  
 今 村吉朗  
 大阪市北區川崎町二四  
 吉岡よしし源  
 兵庫縣武庫郡甲東村神  
 呪字東河原九番ノ十五  
 竹 本 一 竹  
 大阪市西淀川區  
 姫島町一八八七  
 永 島 二 水  
 尼崎市西區敷區  
 別所村五三八  
 深見如月  
 大阪市此花區春日出町  
 北港住宅八十一ノ一  
 小林隆三(文月)  
 大阪市此花區西島  
 町北港住宅三一四  
 清水 虛 白  
 大阪市此花區古  
 野町二丁目四七  
 原 吟 木 三  
 尼崎市竹屋新田村  
 一九九(事務所)

賀 正

宮尾しげを

東京市外葉鴨  
宮仲二〇〇三

賀 正

橋本二柳子

川柳雜誌社事務所

豫告 一月下旬左記の處へ傳宅いたします  
 大阪市住吉區杭全町(新築中)  
 振替 大阪 七五〇七〇  
 大阪市港區八條通二丁目

賀 正

麻生路郎  
麻生葎乃

賀 正

一 月 元 旦

清水製本所

和洋製本  
 古本綴直シ  
 講義録  
 諸雜誌  
 折寫眞ブック  
 金文字入

大阪市東區内久寶寺町三丁目十九番地  
 但シ谷町五丁目停留所一牛西入北側

南海電車

賀正 池澤 樂居

大阪府下高師ノ濱

大阪醫科大學

賀正 長崎 柳秀  
長谷川 一徹

川柳詩研究社

賀正 蛭子省二  
蛭子ます  
朝鮮光州不動町十二

賀正 大島 濤明

大連市西公園町一四五

賀正 元旦

昭和も三年さなりました、劇時  
代的の川柳を生む事を目指して  
お互に進ませう

大連市龍田町一一七番地

佐々木三福

賀正 喜田 飯山

堀 楓 林

和歌山縣田邊町今福町壹  
柳 陸 社

黒木寫真館

賀正 黒木 莢豆

西宮東口停留所南

賀正 中澤 濁水

高知市木輿力町

賀正

大阪市外豊中町榮通二丁目

石賀馬行

大阪市東淀川區中津濱通二ノ七七

塚崎松郎

兒も妻もみなすこやかに元日の  
雑煮の膳にむかひけるかも

朝鮮江原道鐵原

金剛山電氣鐵道會社

石黒易二  
(愚郎)

(金剛山御探勝に就ての御照會を  
歓迎いたします)

賀正西本三笑

大阪市天王寺區東平野町二丁目  
(山田重方)電話長南二八三五番

大阪市南區鹽町通二ノ二三

野村青子

賀正

大阪市北區茶屋町鶴ノ茶屋

古谷伴内

賀正

岩本素人

岩本武子

京阪沿線香里

賀正岩崎柳路

東州市芝區愛宕町一ノ一六  
大成社内  
電話芝一三八四番  
三〇八〇番

神戸三人組

千鳥

賀正

芳香子

郊村

賀正太田朝陽

南海沿線濱寺驛前  
電話濱寺四〇八

電氣旬報柳壇の句を募る

◆用紙ハガキ、題隨意

賀正

安井ひろし  
安井欣女

大阪市南區安堂寺橋西詰

賀正 福田山雨樓  
濱速區 湊町保線  
事務所 戎一〇〇三

賀正 森田輝翠  
大阪市天王寺區生玉前町八〇

賀正 岡田陽喜亭  
大阪市東區錦屏町二丁目二六  
電話 東三二一二替

賀正 畑田炭車  
大阪市濱速區惠美須  
町二丁目一五〇

賀正 愛知樂一  
大阪市濱速區敷津町  
二丁目一〇

賀正 加納嶽堂  
兵庫縣加古川郡加古  
川町加古川信用組合

賀正 兼重白鷗  
コタツ川柳社  
山口縣都濃郡富岡村上野

賀正 松盛琴人  
大阪市此花區上福島  
南三丁目六六

賀正 尾添雷相  
島根縣鏡川郡高松村

賀正 蛇籠川柳社  
大阪市南區田島町一六

賀正 村井多喜女  
賀正 陶山秀甫  
大阪市濱速區立葉町一三一〇  
福田鶴峯  
大阪市天王寺區逢坂上之町二二七

賀正 中見光路  
南海沿線粉濱町三五三

賀正 藤堂十紫  
大阪市北區浮田町六五

賀正 關本雅幽  
大阪市港區鶴町三丁目一〇

賀正 竹田芦穂  
大阪市港區八條通二丁目

賀正 木村晃卓  
別府市行合町

賀正 侯田花峯  
石川縣金石町港町  
橋本牙羊  
石川縣石川郡安原村

諒闇の衣を捨てた旗の色

倍舊の御交誼を願ひます

中野柳陽

長春北柳會

賀正

高橋かほる

大阪市南區北炭屋町三二  
電話南五九六番

賀正 小田無限

福岡縣宗像郡池野村

賀正 松丘町二

松江市外川津 野津方

賀正

高見柳骨

大阪市南區玉屋町四〇

賀正 額様と畫 高須賀商店

大阪市此花區貫島宮居町一〇

賀正 吉川啞人

山口縣久賀町日曜堂書店

賀正

越村加香

大阪市東區備後町二丁目九  
(金子方)電話本町八二二番

賀正 東松山子

大阪市天王寺區逢坂上之町八

賀正 青砥不二綱

松江市天神町

賀正

徳田双柳

大阪市住吉區安立町五丁目一四〇

賀正 桑原京兒朗

略號 京 耶 京都市七條大宮東

賀正 豊田流星

大阪市東區南農人町一丁目 山田印刷所

賀正

徳田太閤

大阪市住吉區安立町五丁目一二二

賀正 安藤花蝶

安東縣驛前通社宅第一ノ二

賀正 澤井朱唇子

大阪市北區空心中町一丁目 四二 電北七二六一番

賀正

酒井駒人

神奈川縣平塚町旭座前

賀正 猪野燕柳

大阪市南區澁谷仲ノ丁 五四 山岸美容院

川上三太郎編

四六判横綴  
四百頁

定價壹圓五拾錢

郵送料  
拾錢

# 新川柳壹萬句集

編者川上三太郎氏は現代川柳界の最大權威として名人の稱ある人。その編むところの本句集は新川柳中興以來昭和に至る二十餘年間、日本内地は元より北海道、樺太、臺灣、朝鮮、滿州、支那、南洋の遠きに至る各地より蒐集、厳選したもので、大別して「人の一生」「人の生活」「時は流れる」「朝から夜中まで」「地にあるもの」の五部とし更にこれを類別としたる如き全く川柳歳時記の觀あり。初心者にとりては最もよき指南車であると共に、讀書人にこりても亦興味深き、世界に於てたゞ日本のみが有する最も短かき人生の深刻なる記録である。

法學博士  
三面子

岡田朝太郎著

寛政改革と柳樽の改版

四六判布裝  
四百頁

定價貳圓五拾錢  
送料拾八錢

同

隨筆

虛心觀

四六判布裝  
四百七十二頁

定價貳圓參拾錢  
送料拾八錢

松村 範三著  
川柳日本俗說史

三六新製布裝  
四百八十六頁

定價金貳圓  
送料拾貳錢

發行所 東京日本橋區東區大町五番地 磯部甲陽堂

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術  
印刷百般

藤本兄弟社

大阪市東區農人橋二丁目  
電話東一七〇番・七七〇番

## 讀書子に告ぐ

今のやうにあまから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することゝは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことかわからう。

(路那生)

# 古

# 本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

### 古書目録

が出来ました。御入用の方に贈呈します。

「川柳雜誌」で見たと御書き添へ 御請求を願ひます。

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

明けましてお芽出度ふ存じます

お給仕は美人の白魚のやうな手

お料理は材料を吟味したフランス料理

初春の香りと幸福の味を盛ったカクテル

お誘ひ合はして皆様のスズランへ

## スズラン

本店 南地 戎橋 北詰  
支店 南地 新戎橋 北詰

電話南三四五一番

加

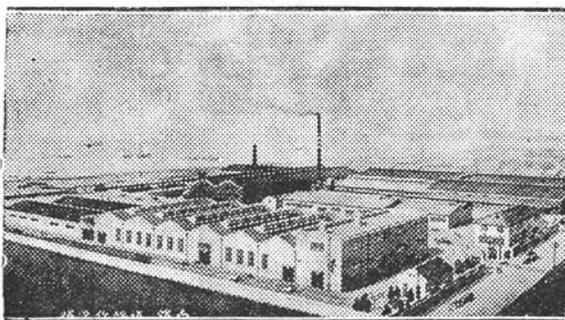
正

アサヒ  
ポル  
ビール

アサヒ  
ポル  
ビール



# 賀 正



(新築工場全景)

## 「白鶴通信」

### 東洋一の清酒工場

天下に冠絶せる、清酒白鶴愛飲家各位の多大なる御愛顧によつて、他の追従をゆるさざる模範的清酒工場竣工の竣工を茲に御披露するに同時に感謝の意を表する次第であります。

同工場は二ヶ年の時日、工費五十萬圓を費し昨年四月参拾日竣工致しました。新工場は全部電動力により、連續的自動工場機によつて、理想且つ衛生的に製品せらるゝが故に最も安全に飲用する事が得られます。製品能力は従來に比し數倍致しましたので倍舊の御愛顧に依て尙ほ一層發展致したのであります。

昭和三年元旦

灘御影町

嘉納合名會社敬白

「萬よし川柳として」白鶴」の句を券集します。各地川柳家各位の御名吟の御投稿を期待します。

# 萬よし川柳懸賞募集

題 銘酒「白鶴」

▽用紙ハガキ、一人三句限

ノ切 一月二十日

選者 相元紋太、塚崎松郎、石賀馬行 三先生共選

發表 川柳雜誌 三月號

賞金 第一席 拾圓 一名

第二席 五圓 一名

第三席 三圓 一名

佳作 壹圓 拾貳名

採點 三才三點、五客二點、平拔一點

附記

萬よし川柳は當分これで行切ります。

投句は清記して選者へ送ります。

投句所 大阪道頓堀新戎橋

庄 萬よし

昭和三年一月一日

## 口上「白鶴と私」

私の経験する處によるこ、大正初年の不景氣は昭和初年のそれに劣らぬ深刻さであつた。色々の空想にかられて、神戸貿易共進會を當込んで神戸地圖を出版したり、無理な工面をして湊川新開地へ蓄音器の店を出したり、少し儲けて多く費ひ、淋しさを醫するに玉を突く碁を打つ、デカダン生活のごん詰が小野柄通三丁目の古本屋の老舗、在品全部を渡して四分の二程の債務を果したに過ぎなかつた。大正二年の初秋落城してから、滿州へ行かうとして備前鹿忍の友人にたよつて行くと旅行中さ來る、飛行家にならうとして家庭で許されない。暮れから正月へかけて堂島の俠客F氏の食客となつて水を汲み下駄を揃ひ、春は鶉越の奥の友人Nを訪ふに徒歩晝夜を分たず、眠るは驛の待合、山道の地藏堂なり、食ふは野の芋、大根なり山の椎、栗の實なり、窮々たり、又悠々たり。妻は郷里の我兩親の許に放浪の夫を偲び、夫は天涯の孤客、草を枕に夢郷關の兩親、弟妹、妻の上に飛ぶのみ。

大正四年一月、同窓の誼みで拾はれて白鶴店員として會計係を命ぜられ、三度の飯は温かし、夜が明けた大阪の道は廣い。次の年は販賣係助手を命ぜられ、社宅に落ち着いて妻を招んだのは一年半目であつた。この好意と援助で大正六年一月今の店を始めてからも十年になつた。私が少しも川柳のため盡し得られるのは、物質的にも精神的にも白鶴の賜と言ふても差支へない譯である。

萬よし川柳も、う四十回になりました。これで暫く中止して専ら創作に精進する積りです。暫くお別れする題を銘酒「白鶴」にした口上。以上

尙第一回より高選の勞を煩はした

蓬吟、溪花坊、水府、五葉、寛汀、南北、杜若、雀郎、文久、幽香、松郎、馬行、刀三、英豆、飯山、紋太、路郎(順序不同)各先輩と投句各地川柳家へ熱烈なる謝意を表します

昭和二年十二月十二日記す

萬よし亭主人 恐惶頓首



“おめでたう”

洋書材料と額縁

大阪心齋橋

河内洋書材料店

電話南 2 1 2 8

番替口座大阪47938

(カタログ御入用の方は)  
郵券六錢封入御申越下さい

# 初詣で

◇大阪から真恵方は南海線◇

官幣大社

住吉

神

社

社

四日

初

卯

辰

五日

初

辰

厄除

あびこ

観音

社

社

元旦より一週間開運厄除祈禱

官幣大社

大鳥

神

社

社

別格官幣社

阿倍

神

社

社

厄除

方違

神

社

社

厄除

百舌鳥

八幡

社

社

◇あきの方巳午の間萬よし◇

# 南海電車

にきびとり

# 美顔水

心ある家庭

には是非常備せられたき皮膚衛生薬

(一) ニキビ、吹出物——婦人は固より男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見

よいもので御座いせんが、この薬は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二) 蚤、蚊、南京虫——その他毒のある虫にさされた時、この薬を附けますと、不愉快な痛さや痒さが止まり、さされた跡が

腫物なきになる事が御座いせん。蚤や蚊で夜お子方のムツかる時なき、この上ない重寶な事がわかりになります。

(三) 皮膚を美しくす——斯ういふ薬

ですから、常用すればニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ様に綺麗になり、顔の美しさを増しますので、心ある家庭に常備せられて居ります。



元賣發

(販大・京東)

館天順谷桃